

R E C

TECHNICAL REPORT No.0002

I S S N 0918-2861
RECT-SS360

〈ポーランド社会研究資料①〉

ポーランド家族の生活史 I

Life History of Polish Families I

大山 信義

Nobuyoshi OHYAMA

Mar. 1993

静修学園

北海道環境文化研究センター

HOKKAIDO RESEARCH CENTER OF ENVIRONMENT AND CULTURE

〈ポーランド社会研究資料 ①〉

ポーランド家族の生活史 I
Life History of Polish Families I

大山 信義
Nobuyoshi OHYAMA

静修学園

北海道環境文化研究センター

HOKKAIDO RESEARCH CENTER OF ENVIRONMENT AND CULTURE

ポーランド家族の生活史 I

ここに収録する2つの物語は、筆者らが日本とポーランドの労使関係比較研究（後述）に参加した際に、現地のワルシャワおよびラドムで取材した口述生活史記録の一部である。このたびそのうちの2編を〈ポーランド社会研究資料①〉として本稿で公開し、これまでほとんど知られなかったポーランド社会の裏面史の一端を明らかにする。

目 次

はじめに

1 共同の巣のなかで ●ある職場リーダーの生活史

少年期
職業学校へ
軍隊入りをまぬがれて
結婚
マイスターとして
ブリガード制のもとで
連帶の運動にかかわって

2 刻まれた葛藤 ●母と娘の戦争体験

パートⅠ：母
16歳の花嫁
強制労働へ
敗戦のなかで
収容所で殺された夫
パートⅡ：娘
エリジビエタの孤独
傷つく少女
親に反対された結婚
離婚へ

あとがき

はじめに

1. 1990年1月下旬から約2カ月にわたり、日本労働研究機構とワルシャワ中央計画統計大学（当時）¹⁾の資金援助によって、両国の労使関係の比較調査が実施された。筆者は両国の社会科学の調査団の一員として、アンケートの設計段階からかかわり、期待以上の成果をあげることができた。²⁾ この調査は東欧の工場を西側の研究者にはじめて公開したこと、調査対象の事業所について経営者を含む全員の面接調査が行われたことなど画期的な企画であった。

それとともに意義深いと思うことは、ポーランド滞在中の1カ月の連夜にわたり、いわゆる生活史法（life history methodology）によるインタビュー調査が実施されたことであった。³⁾ このインタビューは、工場などにおける面接調査を終えた夜6時ころから10時半くらいまで、ワルシャワ在住の社会学者などの協力を得て、従業員の家族を訪問して行われた。この調査も東洋人によって、はじめてポーランド家族の調査が行われたとして注目された。

インタビューは聴者が自由に質問し、話者がそれに応えるという形式で進行した。家族生活史の取材に主にかかわったのは、この面接調査の日本側主査をつとめた吉野悦雄氏（北海道大学経済学部）と大山（北海道大学文学部／当時）の2人である。

2. ポーランドにおける調査は、3つのプログラムから構成されている（次頁、図1を参照）。第1は政府・行政機関、労働組合、企業にたいするヒアリング調査、第2は事業者、従業者個人にたいするアンケート調査、第3は家族レベルのインタビュー調査である。政府機関としては大蔵省と労働省、労働組合については官製労組（OPZZ）のナショナルセンターと連帯労組（SOLIDARNOŚĆ）のワルシャワ本部が選ばれた。

工場、事業所で行った個人アンケート調査の対象となったのは、ワルシャワ県ブルシクフ市協同組合、ワルシャワ市のモコトウフ区役所とシフェルチェフスキ工場（精密機械）およびラドム市のポルメタル工場（金属製品）ではたらく全管理職者、全従業者の約1700名であ

る。⁴⁾ アンケート調査は自記方式と面接方式を併用し、面接にはワルシャワ大学とラドム経済大学の学生の協力を得た。このアンケートデータによる筆者の研究分担は、組織風土と労使関係の国際比較に関するものであった。⁵⁾

本稿の口述生活史のインタビューは、第3のプログラムにかかわるものである。吉野と大山が随意に《夜の調査》と呼んでいたこの仕事は、第2のプログラム、すなわち工場などにおける個人面接の対象者のうち内諾を得られた人に、人生史や職業上のキャリアなどを自由に尋ねるものであった。

ポーランドの社会の深層を理解するためには、工場等におけるアンケート調査だけでは当然にも限界があると思われた。これにたいして《夜の調査》は昼間のアンケート調査をたんに補完しただけでなく、ポーランドの社会を内側から把握するうえで大きな意義があった。

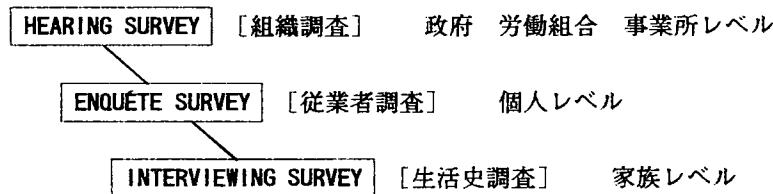


図1 ポーランド調査の構成

3. 筆者はここしばらく口述生活史の研究にのめり込み、ささやかながら社会学の新たな展開を意図してきた。⁶⁾ 筆者は話者とのインタビューを再構成し、作品としての生活史を著していくうちに、やがて社会学の「学」の方よりも、社会的現実の側に身をゆだねていくようになった。社会学の伝統のなかで生活史研究といえば、ただちにポーランドの社会学者F・ズナニエツキその人の名前が想起される。⁷⁾ そのポーランドの現地で生活史のインタビューを実施できたことは奇縁にすぎない。

しかし、現地ポーランドが共産党支配の終焉という大きな社会変革に直面していただけに、ポーランド現代史の裏面に触れたインタビューは、生活史研究の意義についていっそうの重要性を確信させるものであった。

その意義の一つは、口述生活史は語りとしての歴史であることから、人びとが実際に体験した人生史、職場史を客観的な史実と重ね合わせることによって、ポーランド史それ自体を主観的に再構成ができるということである。例えば戦争の問題は、科学的研究では戦争の因果関係が問われるが、口述の生活史のはあい「私にとって戦争とは何であったか」という形で、主観的なリアリティの問題として問われるということである。スターリン時代、あるいはワルシャワ蜂起や連帯の政治運動のもとで、市民がどういう生活、感情をもって、その状況下を生きていたのか。新聞などの報道では分からなかったことも、口述生活史は明らかに

してくれる。

いま一つの意義は、話者と聽者との自由な対話をつうじて、この国のメンタリティに触れることができたことであった。われわれ〈西側〉の人にとって、ポーランドといえば第2次世界大戦後、ソ連軍の進駐によって生まれた社会主義社会というイメージしかない。しかし、インタビューをつうじて了解できたことは、この国の人びとのメンタリティが共産党のイデオロギーとは無縁であり、カトリシズムの宗教的基盤と、家族・親族・マフィアを中心としたコネ社会に根付いている点が明らかになった。

換言すれば、現代のポーランドは宗教基盤、社会構造、経営組織のいずれをといっても、社会主義の政治 = 社会システムとはかならずしも関係なく、伝統社会のシステムのうえに成立し、これを継承している（図2を参照）。ここで伝統社会というのは、すくなくとも第2次世界大戦以前のそれであり、宗教基盤と経営組織のなかに、中・近世以来のシステムを継承しているものがある。

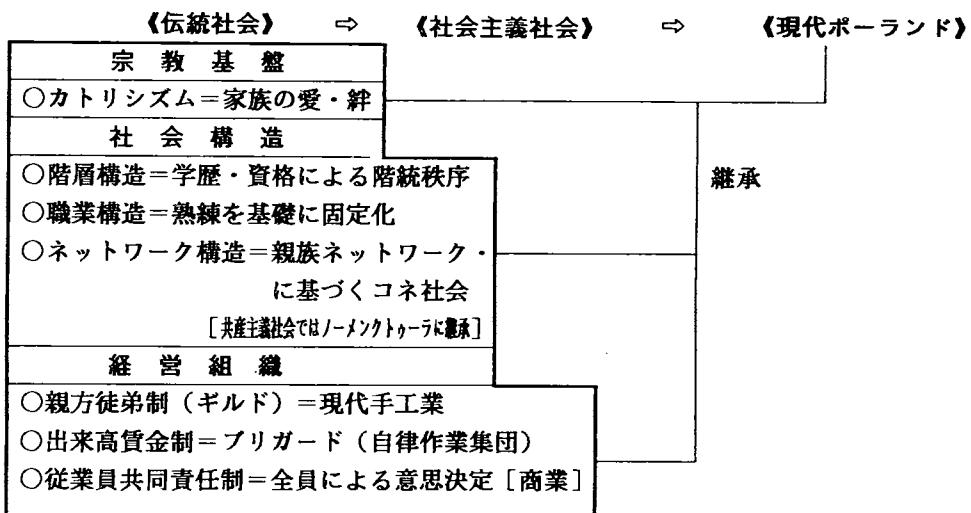


図2 ポーランドの伝統社会とその継承

4. このようにポーランドは宗教基盤、社会構造、経営組織の面で第2次世界大戦以前の様式を受け継いでいるとはいえ、家族生活史のインタビューが行われた時期は、連帯主導の政権が確立して間もないときであった。したがって一党政権の政治システム、中央計画経済に立脚した経済システム、社会主義イデオロギーを支持する価値システムが、まさに瓦解の状態にあったといえる。政治システムは民主主義の意思決定システムへ、経済システムは市場経済システムへ、価値システムは流動的な欲求充足システムへ、それぞれ変わりつつあった。

ソ連軍の進駐以降、スターリン時代に構築された国家体制のヴェールが剥がされたことにより、ポーランド社会の基層が純粋な形で顕在化した。したがって現代のポーランドは、一方では政治システム・経済システム・価値システムの変容が進み、他方では伝統社会を継承

している事態が同時にみえてくるのである（図3を参照）。いまポーランドの人びとは、スターリン体制とは何であったのか、連帯の運動は何であったのか、自問自答を開始したとともに、自由に自らを語り、社会のあり方を模索しはじめていたのである。こうした状況は、本稿の口述の随所から読み取ることができよう。

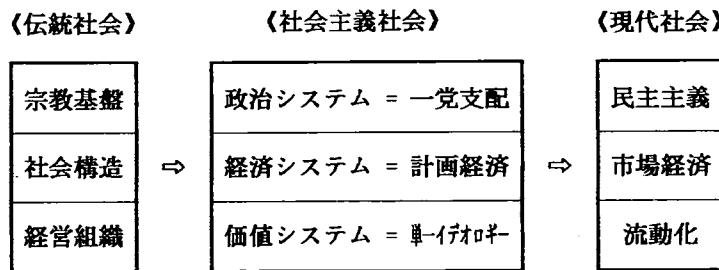


図3 ポーランド社会の変容過程

5. 本文2つの物語のうち《共同の巣のなかで：ある職場リーダーの生活史》の話者は、ワルシャワのシェフェルチェフスキ工場のブリガード長であるレシェク・パブウォフスキさんの事例である。シェフェルチェフスキ工場についてあらかじめ説明しておくと、同工場は1898年に設立された精密機械工場で、ブリガード制（system brygadowy）という独自の自律作業集団のもとで、ノギスやマイクロメータを生産している。

シェフェルチェフスキ工場はポーランドの伝統的な職場秩序を形づくっていたマイスター（親方または作業長）制を改めて、1986年に職場改革を行い、現在のブリガード制を導入した事業所である。

旧システムであるマイスター制は、ポーランドの経営がまだ手工業制をとっていた時代の産物である。ポーランドでは近代企業といえども、いまだに熟練労働継承のシステムであるマイスター制、つまり親方徒弟制度を多く残しているのが現状である。シェフェルチェフスキの場合は、その優れた技術水準のもとで生産性を向上させるため、伝統的なシステムを廃止して〈より民主的で人間的なシステム〉とされるブリガード制の導入にふみきった工場であった。

話者のレシェクさんは1971年からこの工場へ勤務し、1978年からマイスターになるのであるが、インタビューの当時はブリガード長の地位にあった。口述史のなかで注目されるのは、シェフェルチェフスキ工場の職場改革期に、ブリガードの集団がどのように形成されていったかの証言である。レシェクさんの口述は少年時代からはじまり、結婚、連帯の民主化運動、ブリガードの話に及んでいる。

本文の第2の物語《刻まれた葛藤：母と娘の戦争体験》は、第2次世界大戦を状況に置い

た母と娘の口述をまとめたものである。話者は母のステファニアさんと娘のエリジビエタさんである。筆者がステファニアさんの家族にお会いできたのは、彼女の孫娘にあたる女性がワルシャワのブルシクフ協同組合の経営する生産工場で働いており、その女性がたまたま筆者が担当したアンケート調査の相手であったことである。

最初はその女性のお宅へ伺い、若い世代の家族史を取材するつもりであった。実際に訪問してみると、祖母であるステファニアさんの話に興味をもち、ついで傍らにいたエリジビエタさんが話に加わってというようにして、口述は3日間にわたって続けられた。

ステファニアさんの口述のクライマックスは、おそらく強制収容所での労働体験と夫の戦死である。娘のエリジビエタさんの口述でも、その幼女時代の思い出に戦争の傷痕がよみがえる。お二人の共通点は戦争の体験に加えて、若すぎた結婚と、夫との早すぎた別離である。筆者は初めて知り合ったお二人が、辛いはずの個人史を率直に話され、その結果として〈女性にとって戦争とは何であったか〉という重い問い合わせられたことに戸惑っている。

6. 以下、本文ではこの2つの口述内容をできるだけ忠実に再現し、読者の理解を助けるために、必要に応じて筆者による注解を付した。本稿はポーランド社会研究の1資料として、また家族生活史研究の方法として、あるいは1つの読物として、読者の目に触れていただければ有り難いと思う。今後はさらに続編として、別の資料を公表の予定である。

(注)

- 1) ワルシャワ中央計画統計大学 (SZKOŁA GŁÓWNA PLANOWANIA I STATYSTYKI, WARSZAWA) は1991年から
ワルシャワ経済大学に校名を変更。
- 2) その成果の1部は既に出版されている。
吉野悦雄(編)『ポーランドの労働・日本の労働 — 日本・ポーランド共同企業調査報告』上巻 (1991
年1月)・下巻 (1992年2月)・別巻 (1991年3月), 東京・日本労働研究機構.
- 3) 大山信義「労使関係と生活史法 — 日本・ポーランド共同調査の事例」『第38回北海道社会学会大
会報告要旨集』1990年, 札幌・北海道社会学会.
- 4) このアンケート調査の質問項目は内部労働市場, 職業経歴, 労働条件, 職業満足, 労働意識, 労働
組合, 職場内人間関係, 職場内葛藤, 値値意識, 家族構成などを内容としている。
- 5) 大山信義「組織風土と職場の労使関係」『ポーランドの労働・日本の労働 — 日本・ポーランド共
同企業調査報告』下巻 (前掲), 1992年.
- 6) 筆者による生活史研究に以下のものがある。
大山信義「反省理論としての生活史」『現代社会学』24, 1987年, 京都・アカデミア出版会.
—— 「ある女相続者の生活史」『北海道を探る』5, 1988年, 札幌・北海道みんぞく文化研究
会.
—— 『船の職場史 — 造船労働者の生活史と労使関係』1988年, 東京・御茶の水書房.
—— 「地方都市研究資料・山形県米沢市 (一)ある製糸女工の生活史 — インタビューの記録」
『社会学研究報告／実証研究4』1991年, 札幌・北海道大学文学部人間行動学講座.
—— 「地方都市研究資料・山形県米沢市 (一)ある一六代織元の生活 — 馬下助左衛門とのイ
ンタビュー」『社会学研究報告／実証研究5』1991年, 札幌・北海道大学文学部人間行動
学講座.
- 7) Tomas, W. I. and Znaniecki, Florian, 1918-1920, The Polish Peasants in Europe and America,
first published by The University of Chicago Press (Chicago).

【謝 辞】

ポーランド滞在中のインタビューの実施にあたっては、次の女性社会学者の協力を得た。

ANNA RODZEWICHさん（家族計画カウンセラー／ワルシャワ中央計画統計大学助手）

IJA MARIA OSTROWSKAさん（精神病院カウンセラー）

EVA LEWICKAさん（連帯労組代議員）

BABARA RUDNIEWSKAさん（ワルシャワ中央統計局勤務）

この4人が代わる代わる筆者に同行してくれた（所属等はいずれも調査当時）。とくにインタビュー調査のプロであるロゼウィッチさんは数日にわたって同行し、ポーランド社会に不慣れな筆者を側面から援助してくれた。

録音テープからの翻訳に関しては、札幌在住のハリーナ熊倉さんの全面的な助力を得ることができた。ハリーナさんは口述内容の事実を正確に伝え、ポーランド語の俗語、ニュアンスに十分に配慮して翻訳に努めてくれた。ハリーナさんの長時間にわたる労苦のおかげで、はじめて本稿の公表が可能となったことに感謝したい。

筆者にポーランド社会研究の機会を与えてくれた吉野悦雄氏は、筆者とは別行動で連夜にわたって生活史インタビューを精力的に消化された。吉野氏のエネルギーにも支えられて、数編のモノグラフを集めることに謝意を表したい。

【凡 例】

- 1 本稿の記述のうち〈 〉内は聞き手（大山）の問い合わせを示す。
- 2 文中の（ ）内は話者の口述内容の含意を補足し、読者の理解を助けるために追加した。
- 3 同じく文中の〔 〕内は編著者（大山）による補注である。
- 4 口述文中の＊印は、編著者が必要に応じて当該ページに解説を付した箇所である。
- 5 本稿にかかわる全内容は、編著者の責任において収録するものである。

1 共同の巣のなかで

●ある職場リーダーの生活史



写真1 話者とその妻

【口述者】

○レシェク・パブウォフスキ 1950年、ワルシャワ県コチャルギ・ノヴェ村の生まれ。1971年、シフェルチェフスキ精密機械工場に入職し、金属加工工場に配属され、作業長（マイスター）を経て、1986年の職場改革期から同工場の自律作業集団（プリガード）長となる。ワルシャワ市のウルサス地区在住。

○收 錄 1990年3月6日 レシェクさんの自宅で。

少年期

〈レシェクさん、あなたはいつどこでお生まれになりましたか？〉

ぼくが生まれたのは1950年6月25日、ワルシャワ県のコチャルギ・ノヴェ(KOCZARGI NOWE)という村ですよ。1978年までそこに住んでいましたね。28歳のときノヴェから離れたんです。

そこはワルシャワの北西12キロくらい離れた村で…。村といつても農民よりもワルシャワではたらく労働者が多かったんです。母は退職してたし、父は年金生活者。病気だったから働かないで、お金をもらっていたんです。

〈子供のころはどういう村でしたか？〉

いまは立派な村になっていますが、そのまえは貧乏な村でしたね。以前はアスファルトの道もなかったんです。いまではレンガづくりの建物が多くなっていますが、昔はほんとんどが木造の家でね。現在はすっかり変わってますね。

その前は国道がぜんぜんなかったのですが、いまはアスファルトになってバスも通っています。村の近くにプシチア・カンピノフスカという森があって、その森の淵の近くにぼくの家があったんですよ。

村は典型的な農村ですが、例外もあって、土地をもたない〔非農家の〕人が10パーセントくらいはいましたね。家の近くには野菜を植える小さな菜園が200平方メートルありました。野菜、穀物、かぶなどをつくっていたんです。

〈おじいちゃん、おばあちゃんのことを覚えてていますか？〉

おじいちゃんも労働者でしたね。おじいちゃんの仕事といつても、とくに専門の資格をもなないもので(*)、道路の監督者、道路の横にある溝の掃除などをしていたようです。おばあちゃんのこととはなにも知りません。

ぼくの両親はおじいちゃんの家には住まずに、自分で土地を買い、家を建てて住んでいたんです。両親の家の近くに、おじいちゃんたちが住んでいました。両親は結婚してから、アパートを借りて家賃住まいをしていたんですね。

その後で自分の家を建てたんです。きょうだいは兄と妹がいます。兄は1948年4月の、たぶん17日生まれ。妹は1952年2月10日の生まれです。

＜小学校時代のことを聞かせてもらえますか？＞

コチャルギ・ノヴェには小学校がなかっから、隣り村のジェロンキ (ZIELONKI) の小学校へ通いました。ただジェロンキの学校といってただけで、とくに校名はなかったですね。コチャルギ・ノヴェの村とくらべると、ジェロンキの村ほうが大きかったから、そこに小学校の建物があったんです。

学校まで2キロ半の道を通いましたね。そのあと7年生になってからは(**)、ぼくの住んでいる近くにコチャルギの学校ができたのでそこへ転校になりました。

コチャルギの小学校は3教室だけで、1教室の大きさは30平方メートルくらいしかなかったんです。生徒数はぼくのクラスでいえば、1年生から7年生まで40人はいました。

それが3交替の小学校だったんです。朝8時から夜の9時まで学校では授業があったんです。時間ははっきり決めてませんでしたが、ぼくの授業開始は2時か、3時でしたかね。上級生は午後3時から、下級生は朝の8時か10時に授業が始まり、午後1時くらいまでの授業でしたね。

コチャルギに新しい学校ができたときは、2階建ての校舎になったので、ふつうの時間になり、交替はなくなったんです。いまは建物をもっと大きく広げているところです。

まえは教室に暖房装置が入ってなかったので、教室に暖房を入れるようにボイラー室を作っているところです。クラスを増やすために、建物を増築してるんです。もう一つの目的は運動場をつくるためにね。

＜お父さんなどから戦争の体験談を聞いたことがありますか？＞

両親から聞いていた話によると、例えばぼくの父が15歳のとき、ドイツの強制労働に行かされたと聞いています。妻の父のばあい、ちょうど軍隊から家にかかる途中でつかまえられて6年間、収容所の捕虜になりましたけど、その場所はどこかは知りません。たぶん3年間はドイ

* ポーランドはいまだに資格社会である。大戦後のスターリン体制のもとでも、親方ギルド制にもとづく熟練 = 資格が重要視されてきた。文中で「専門の資格をもなないもの」とは、専門職資格を欠いた「職種」であることを示す。ちなみにポーランドでは1974年の労働法典制定時に、特定の職種には職業資格が必要なことを条件とした。

** 現在のポーランドの小学校 (szkoła zasadnicza) は修業年限8年間で、その後は資格に関連した修業年限1~3年の中等職業学校 (średnia szkoła zawodowa) がある。

ツでしたね。

ぼくの父のほうは、いまのポーランド領、もとはドイツ領に行きました(*)。妻の父はもっと西方へいかされたようです。

父は若い男子として、ほとんどは農業労働をしていました。2日間、食べ物をもらわなかつたときもあったし、ふつうはコーヒーと乾いた黒パンしかもらえず、それも堅くて食べられなかつたそうですよ。要するに、懐かしいといえるような、いい思い出ではありません。

父は〔戦争の話については〕全部を語りませんでしたね。〔大切な〕少年時代に、そういう仕事に行ってしまつたんです。

妻のお父さんは朝から晩まで農業労働で6年間、寝る場所とつまらない食事しか、もらわなかつたんです。ドイツ人の農家がそういう労働者を雇っていました。ただの労働力だったんです。そこで働いて健康を害しました。

妻のお父さんは〔強制労働による健康障害の証拠書類もないのに〕これから裁判所を使い、その〔無償の労働に対する〕倍償を要求するつもりです。一緒に向こうにいた証人がまだ生きているんです。そういう倍償に関して、ある機関を訪ねてみたら、裁判所が決定してくれるといわれました。ジュネーブに戦争の損害賠償に関する機関があるので、そこに連絡してからどうするか決めるかもしれません。

〈小学生の頃どんな思い出がありますか。将来はなになりたいと考えていたのですか？〉
ぼくの成績は中の中で、とくにうぬぼれる点もなく、手本となるような生徒というわけでもない、人間としては並の生徒でしたよ。成績もふつうだったし、両親が先生に呼ばれることもなかったしね。好きな科目は算数と地理、音楽かな。

ただ、一人の先生の顔がよく浮かびます。ぼくはその先生に殴られたことがあるんですよ。手に傷がつくほど、製図のコンパスで打たれましたね。神経質な先生でね。よく生徒に体罰を加える先生だったから、裁判にかかる裁かれたんです。

もうひとつ事件があって、先生が生徒を殴ろうとしたら、そのもちあげた椅子が壊れたこともあるんです。暴力的な先生だったんですね。算数と体育の先生で。

それから、ぼくは大きくなつたら、神父さんになりたいと思っていたんです。

〈おや、ほんとうですか？〉

ほんとうですよ。オウタジェボに修道院があつて、おばあちゃんがぼくのことを神父さまに話をはじめたほどですよ。オウタジェボの修道院はパロッティノフ (PALLOTYNÓW) といって、この修道院はぼくの住んでいるところから5キロくらいはなれていましたね。

* ドイツ占領下のポーランドは1945年にソ連軍に解放されるまでは、多くの国土がドイツ領であった（図4を参照）。

図4 ドイツ占領下の国境(1942年当時)



おばあちゃんはよく神父さまのところへよく行きましたね。

「わたしの家には、修道院のことについて興味をもっている孫がいます。神父になりたがっている孫が …」

とおばあちゃんが神父さまにいいましたら、神父さまが神聖な画をくれるので、それをぼくは集めました。

神父になることは、みな決まっていたんです。学校が終わるのを待つだけで、学校を終わってから神父になろうと考えていました。しかし学校を終わるころ、考えが変わったんですね。おばあちゃんも両親もカトリックでした。かれらはぼくが学校を終わってから、修道院に行くことを確信していましたけど … 。

職業学校へ

〈小学生を卒業してからはどの学校へ ? 〉

1964年にワリンスキ (WARYNSKI) の建築機械工場の職業学校に入りました(*)。3年制の学校で週に3日は勉強し、あの3日は会社の見習いではたらいていたんです。職業学校には研磨部、金属加工、組立てなどがありましたが、ぼくの専攻は旋盤でした。毎日バスで学校まで通っていましたね。

会社のなかには2つの工場の現場がありましたね。1つはぼくが働いていたところ。これはヤナ・カジミエジャ (Jana Kazimierza)通りに工場がありまして、従業員数は2500人くらいでしたか。会社の全体では6000人くらいかな。仕事の内容は2つとも同じことをやっていた工場でした。ワルシャワにはいろいろな職業学校があるんですが、ぼくは住んでいたところにいちばん近いところに入ったわけです。

月、火、水曜は学校、木、金、土曜は工場でしたね。1年生のとき仕事は1日だけで、2年生のときは2日間はたらき、3年生のときは3日間の仕事をやるというぐあいですね。給料は1年生のとき150ズウォーチ。

最初の150ズウォーチは月給ではなく奨学金として支給されたんです。2年生のときは300ズウォーチ、3年生では450ズウォーチもらつたんです。1964年ころは、いまとくらべればもっと難しい時期でした。いまよりもそんなゆとりがない時でしたよ。

1971年、いまのシウェルチェフスキ工場ではたらきはじめましたが、そのころシベルチェフスキの賃金がいちばん高かったんです。そこでいまも働いて友だちは、1970年ころで2100

* ここでいう「職業学校」は「基本職業学校」zasadnicza szkoła zawodowa のうち、事業所付属の学校の1つである。基本職業学校は産業別・職業別の各分野で労働者を養成するために設けている技能養成校であるが、大部分の生徒は工場等での就業はしていない。これにたいして事業所付属の職業学校では工場内の熟練工から技能を習得しながら学校へ通っている。ポーランドの学校制度については以下の文献を参照。

吉野悦雄「ポーランドの労働概観」(『ポーランドの労働・日本の労働: 日本・ポーランド共同企業調査報告書』下巻、日本労働研究機構、1992年)。

ズウォーチくらいもらいましたからね。

1970年までは、みんな仕事は安定していましたね。いまと違って、解雇などありませんでした。正直によく働いていた人は、いい生活ができたんです。

職業学校を卒業したあとは、3年制の夜間の中等専門学校に入って、働きながら通っていました。この学校は工場附属の学校ですが、建物は工場とは別でジツニア (Zytnia) 通りにある別の建物を借りていたんです。

学校と仕事は2交替で、もし朝に学校があったら、夜は仕事ですね。学校の名前は従業員中等専門学校 (Technikum Mechaniczne dla Pracujacych im. Ludwika Waryńskiego) といって材料学、工学、製図などを学びましたよ。

その工場の専門学校へ入ったのは、従業員の30パーセントくらいかな。ぼくは自分で入学を決めたんです。クラスの友だちと話したら、職業学校の友だちのうち30人中8人が入りました。学校の1クラスの生徒数は26人か27人くらい。

そのまえの学校の生徒以外には、町の他の学校の生徒も入学してきました。青年だけでなく40歳くらいの人も学びにきたし、長いブレイクがあって再入学した人もいるというように、年齢もまちまちでしたね。ぼくが中等専門学校へ入ったのは高い資格がほしかったからですよ。ふつうの労働者でなく、自分の生活をもっと高めたかったんです。ただの労働者だけでなく、なにか上のものを求めたかった…。

〈 そのときはもう、神父さんになることは断念していたんですね ? 〉

小学校を出てから神父になる夢がなくなったから、みんなにからかわれるんです。

「おまえはもう本格的な男になんだから、神父になんか、なりたくなくなったんだろうよ」といわれましてね。

いまもカトリック信者としての生活を送っていますが、神父になるという考えは止めました。ほんとうをいえば、いまもすこし残念だと思いますけど…。

神父の生活はそんなに苦しくないと思いますね。だけど、神父になっていればパン [偉い人] になれるから、神父になればよかったかも知れないな。神父になるということには、ばかなことかもしれないけど、もっと実質的な夢があったわけね。

神父になればいい車がもてるし、ミサのときに集めるお金が積もっていい金になる。あまり働き過ぎるということもないしね。

「生きることは死ぬよりよし」(Zyc nie umierac !)といいますからね。ああ、やはり神父にならなくてよかった、といまは考えていますけど。

軍隊入りをまぬがれて

〈 専門学校を出られてから後のこと話をしてくれますか ? 〉

専門学校を卒業したのは20歳のときですが、軍人にならないで、仕事をはじめまたんです。というのはね、父は37年間、軍人をやっていたんです。軍隊の食堂の頭でしたけど。軍隊の台

所の管理人ですね。

軍人になるためには取り調べを受けて軍隊に入らなければならないのですが、父のコネで逃れられたんですよ。

ぼくが取調室にいくと、いちばん最初に待たずに入られましてね。取調室に入るときに、

「パブヴォフスキ、こちらへ (Pawlowski jest) !」

と呼ばれたので

「はい」

と答えてから、

「軍人になるための証明書をください」

というと、軍人が座っていて、軍医もそこに座っていて、なにも取り調べをしないままに、

「きみは軍隊に不適格だ！」

といわれたんですね。要するに父の知り合いの医者が、嘘の診断書を書いてくれたわけですよ。

ある日、軍人証明書をもって、ある大佐がぼくの家を訪ねてきたんです。かれはぼくのほうを向いて話しかけました。

ぼくはどこでこの人に会ったかはぜんぜん覚えていなかったんですが、取調室にその大佐がいたのを思い出すと、大佐は、

「あなたの父さんは長いあいだ、軍隊で働いていたから、それで十分でしょう。なんのために息子のあなたまで、あそこで苦労する必要があるのかね」

というんです。ぼくは軍人にならなかったので、軍隊にたいして悪くいえないけど、70年ころに軍人になった人は、軍隊に愚痴をこぼしたものだけね…。

＜それで軍隊に入らずに旋盤工に？＞

中等学校のときは1971年まではずっと旋盤工をやっていました。71年にワレンスキで仕事をやめて、いまのシウェルチェフスキ工場で働きはじめたわけですよ(*)。

同じような仕事で1年間、旋盤工として働いていたんですが、脊椎が弱かったので仕事を変えなければならなかったんですよ。旋盤の機械で長く働くことができなくなったんですね。お医者さんに禁止されたんです。

それで機械加工に入りました。機械加工ではいろいろな仕事、例えば穴を空ける、ネジを掘る、ヤスリをかける、切削などをやるんです。

いまも病気は続いているんですよ。サナトリウムによく通っていましたけど、その後、潰瘍にもかかり、もっと大変になりました。いまも潰瘍を直すためだけでなく、脊椎の治療

* 1898年に創立のシウェルチェフスキ工場は、戦前から拳銃、タイプライター、ノギスなどを生産する私企業であった。戦後に国有化され、生産性と技術水準においてポーランドを代表する企業となっている。

も受けるためにサナトリウムに通っているんです。

結 婚

〈 レシェクさんが結婚されたのはいつ頃でしたか ? 〉

1970年 9月26日です。まだ〔結婚が認められる〕21歳になってなかったので、裁判所に提出して決めたんですね。妻が妊娠していたということではないんですよ。

妻はワルシャワ郊外の、いとこの家に住んでいましたね。そのいとこは両親が亡くなっていて、いとこの弟も一緒に暮らしていたんですが、軍隊へ行き、ちょうどその軍隊から帰る予定でだったんです。妻はワルシャワに移りたかったんですが、いとこの弟が帰ったため住む場所がなくなったわけです。

ぼくたちはもう長いあいだつき合っていたから、そろそろ結婚すると決めていたんです。〔まだ結婚年齢に達していなかったから〕嘘の証明書を手に入れて、妊娠したふりをしていたわけです。

妻がワルシャワに来る以前に住んでいたのは、南の方のキエレ (KIELLE) 県で、妻はすでに成人〔18歳以上〕だったから、妻のお父さんは賛成していましたけど。

実際に子供が生まれたのは71年で、ぼくは未成年だからワルシャワのシヴェルチェフスキ通りの家庭裁判所で結婚を認めてもらったんです。ぼくは軍隊に入らなくてよかったですから、裁判ではすぐ結婚を承認してくれました。ここでいま、ぼくはこの裁判所で陪審員をやっているんですよ。妻は1950年の11月13日生まれ … 。

お母さんはもう亡くなっていますが、お母さんは農家の仕事、お父さんも農家でしたが、ほかに森林で午前中は樹脂をとる仕事もしていました。

南のシュクチン (SZKUCIN) という、500人ていどの村でしてね。村が林に囲まれていて、農業か林業ですね。あまり作物はよくないから、農業だけでは生き抜けないんですよ。多くは兼業農家でしたね。〔経営規模は〕耕地のほかに、牧場とあわせて2ヘクタール。13歳上の姉がありました。ぼくも12歳上のきょうだいがいますけど。

〈 奥さんと始めて出会ったのは、どこで ? 〉

ぼくはコチャルギ・ノヴェに住んでいたから、ワルシャワで映画をみようと思って、ワルシャワに向かうジェロンキのバス停で出会ったんです。ちょうど妻も、ワルシャワへ向かうところだったから。

(傍らから妻) 「なんのためにワルシャワへ行ったのか。たぶん遊びに行ったんじゃないかしら。そのときはオジャルフの電話局に務めていました。交換手をしていました。

〈彼のはじめての印象は ? 〉

(妻) 「よかったわ、もちろん。はじめて会ったときは、どっちが強く印象をもったかいえませんけど、はじめて会ってから、だいたい9カ月で結婚したんです。どちらの親もたいへん喜んでくれたし、いまも親は満足しているようよ。」

(ふたたびレシェク) ポーランドには2つの結婚式があるんです。1つは午後に教会で、午前中は区役所でやるんです。その区役所の結婚式をしなければ、夫婦として扱われないんです。教会の結婚式はただの伝統ですが、区役所で結婚式をやった証拠がないと、教会では希望しても結婚式ができませんからね。

将来はきっと、教会だけの結婚式でもいいということになるんじゃないかな。ぼくの両親のばあいはそうでしたよ。教会で結婚式をあげて、1年たってから区役所の事務所でやりましたからね。

現在はカトリック派の政府があるから、そういうことになるのでしょうか。神父さんたちがマゾビエツキ首相(*)を納得させるんでしょうね。いずれワレサさん(**)も、それ〔教会だけの結婚式〕に賛成しますよ。

(妻) 「わたしは結婚してからも1年間、交換手を続けていたんです。子供が生まれて3カ月半は育児休暇を使って休み、その後はザボルフ(ZABORUW)という町の郡役所の事務員になって、買付伝票の整理や、報告書を書いたりする仕事をしていたのね。むかしは義務買付という制度があって〔農家は作物を政府に売るのが義務であった〕、穀物や生きている肉を扱っていました。

この仕事は2年間続けたわ。その後は、地方行政の制度〔郡の編成・分割〕が変わりましたから、家から16キロ離れているバビッエ（BABICE）に変わり、そこへ派遣されたのね。いまは農業所得、農家税金の台帳の整理をやっていますけど。」

(レシェク) ぼくたちは結婚してから、ぼくの両親と8年間、同居していました。7年間待ってから、1979年に妻のほうが協同組合住宅が当たったんですよ。それから両親とは別居しましてね。

いまは【住宅賃貸】30年間も待っている人もいるくらいですから、幸運でしたよ。ぼくもあと2、3月で当たる予定だったんですが、妻のほうが先にが当たったのでね。

- * ポーランドのマゾビエツキ内閣は、ラコフスキ首相の後を受けて1989年9月に発足した。連帶主導の初政権であり「ポーランドが戦後初めて全国民を代表する政府」といわれた。統一労働者党（共産党）を含め全会派が一致して生まれ、過度なインフレのなかで多難のスタートを切った。国家行政をイデオロギーと宗教とから切り離すことを方針としたが、宗教が個人の行動を動機づけるうえで重要な要素であるとした。

** ポーランドの自主労組《連帯》のリーダーとして民主化運動を主導。グダニスク造船所の電気工から、1981年10月に連帯の初代全国委員長に選出された。アメリカのタイム誌は同年12月にワレサ氏を「マン・オブ・ザ・イヤー」に選び「勇敢な小さな電気工は、腐敗した共産政権に対するポーランド人の戦いの心、魂としてだけでなく、自由心と尊敬の国際的シンボルとして立ち上った」と述べた（『朝日新聞』1981.12.28参照）。



⇒ マゾビエツキ首相
（『朝日新聞』1981.9.13）



タイム誌に載った ワレサ氏

(妻) 「もしかしたら、そっちのアパートの方が大きかったかもしれないわ。現在は月に2回くらい両親を訪ねてていくの。去年まだ車をもっていたころは、週に3、4回くらいは両親のところへ行ってたかしら。日曜日はきまって行く週間がありました。5カ月前にはその車が盗まれて、まだ見つかっていません。人生でいちばん大切なものは家庭ですね。家庭の雰囲気が…。」

マイスターとして

〈レシェク、あなたの役職上の経歴について教えてくれませんか？〉

1978年までは金具の模型・見本をつくるふつうの労働者でした。78年に頭脳労働者(*)になりました、マイスター〔作業長〕になったんです。

マイスターになって、自分の巣〔作業集団〕をもつようになったわけですね。まず労働者としてはたらいてから、いまは47人の部下をもつ上司になりました。

〈マイスターになるためには、どのような条件が必要でしたか？〉

まずなによりも、仕事をよく知っていることです。そこで扱っている製品のことをよく知っていることですよ。学歴はそんなに注目されなかったですね。いちばん大事だったのは製品にことが分かるということでした。

最初の3カ月は試しにマイスターにさせられまして、マイスターの直接の上司であるディレクツィア〔課長クラス〕が、管理部にマイスターの候補者を提出して、管理部から任命されるんです(**)。みんなはぼくが（作業長として）それほどうまくやれるとは思わず、びっくりしたようですね。そのときは、給料の等級でいちばん高いのをもらいましたね。

〈マイスターの頃は、その事業所にマイスターは何人くらいおりましたか？〉

うちの部門では8人くらいでした。工場全体ではよくわかりませんが、だいたい150人くらいましたかね。ぼくの部の名前は「PR4」という部でした。これは測定器部門のことをさしているんです。

* ここで「頭脳労働者」というのは「肉体労働者」に対する概念である。

** 当時のシフェルチェフスキ工場の職場組織は図5に示すとおりであった。すなわち工場長をトップに、部課を統括する総責任者が置かれ、マイスター→ブリガード長→作業員のラインで構成されていた。

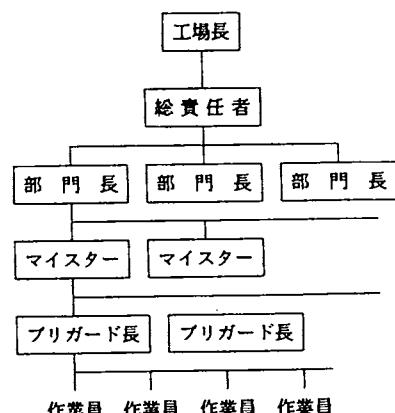


図5 シフェルチェフスキ精密機械工場の職場組織（改革前）

現在は測定器部門と裁断機部門とか呼んでいますけど、当時はPR1、PR2、…、PR6、7、8とあり、他に補助的な部として工具部、仕入部、社会厚生部などがありました。PR4には8人のマイスターがいて、マイスターの下に24人くらいの巣長がいましたね。

78年当時の巣というのは、14人か17人くらい入っている巣でした。この巣では金属の穴を空けたり加工を施したり、ネジを掘ったり部品組み立ての準備するというように、いくつかの巣があり、自分たちの職場から部品が運ばれて、つぎの加工の段階にいくわけです。

それぞれの巣が違う品目をやっていまして、例えば1つの班がトランスマータをつくる、大きい湾曲を作る、違う班が分度器を、角度測定器というようにね。ぜんぶが柔らかい加工の作業で、組立工にたいして部品を準備する仕事でした。

〈マイスターになってから最初に困った問題はなんでしたか？〉

問題がたくさんあったので、なにがいちばん困ったかはいいにくいのですが、いちばん問題になるのは仕入れですね。原料がないばあい、仕事に必要な工具、穴をあける機械、ネジを掘る機械の仕入れですね。道具類の質もよくないので困りましたよ。

病欠者が多かったことも、かなり困ったことの1つでしたね。ときどき自分も仕事場に立たなければならなかったからね。前はぼくもこの職場にいたので、その仕事をよく分かっていたんですが、ぼくがその仕事をすると喜んでくれる人もいたけれど、それがおもしろく思わない人もいたわけです。

(もし自分が)ある1人の部下をにらんでいると、ぼくが上司になったから偉そうな顔をするとか、怒りっぽくなったりとかいわれますしね。ぼくはかつて、同じ巣の出身ですからね。上役の方が悪いと、いうように思われるんですね。

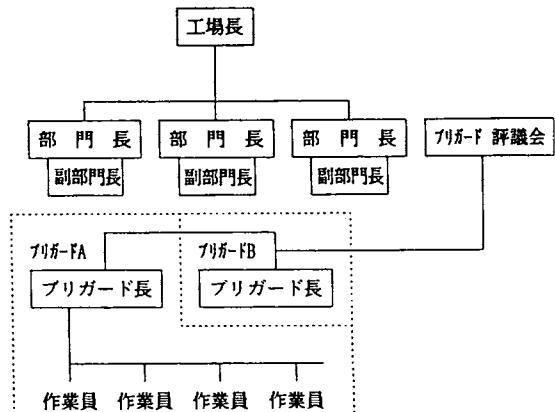
(以前にぼくが同じ巣の労働者であったということは)仕事の内容は知っていたし、人も知っていてやりやすかったから、ある面ではよかったですけれども、一方では同僚たちはぼくが上司になっても、昔の友だちとしてしか扱ってくれないわけです。

(ぼくが上司になる前の)同僚はぼくを友だちとしてしか思ってくれないから、すぐになんでも(上司であるぼくに)頼ってくるわけね。

マイスターの制度は1986年まで続いていたんです。その年の9月から会社では(組織改革によって)ブリガード〔自律作業集団〕制度がつくられました。そのころぼくは病欠していましたから、(改革後の)10月になってから仕事に戻ったんですね(*)。

* シフェルチェフスキの経営陣は1989年5月、生産性の向上と職場の民主化をめざしてマイスターという制度を廃止し、職場組織の改革を断行した。新システムではブリガードと呼ばれる自律作業集団が生産の単位となり、ブリガード長のもとで作業員の募集、作業量・作業時間・賃金の決定が行われている(図6を参照)。

図6 シフェルチェフスキ工場の新組織



ブリガード制のもとで

戻ったとき、いったいなにが起きたのか。巣の仲間が、

「レシェク！ ブリガードがつくられてるだ。いったい俺たちはどうなるんだい。グループをつくってくれよ。そうないと俺たち、仕事がなくなるんだぞ」

といって、従業員たちがぼくに（新しい）集団をつくるように提案をしてきたんです。自分も班をつくりたかったし、従業員もぼくに提案してきたわけですね。

病欠したあとで仕事に戻ったら、ぼくがマイスターであったときの部下は、すでに大部分の人が違うブリガードに移っていたんです。

例えはぼくがマイスターのときに金属加工工たちは、ぼくに忠実であった人でも、違うブリガードに移っていました。ブリガード制になると、新しいブリガードでは、加工工がいなければ仕事にならないで、ほかのブリガード長が加工工たちに

「こっちのブリガードに入らないか」

と誘っていくわけです。ぼくにたいしていかに忠実な人でも、ほかのブリガードに行かなければならなかったんですね。

でも、ある人は移ったけれど、ある人はぼくが病欠で不在だったのに、ほかのブリガードには行かないで、ぼくを待っていたんです。違うブリガードに入る可能性があったのに、その人たちはほかの上司のもとでは、仕事をする気がなかったんですね。

そのブリガード制は管理部が導入したんですが(*)、人の選びかた、それにグループはぼが作ったわけです。ぼくは会社に戻ったとき、自分のブリガードを作るべきと思いました。まずはある金属加工工が、ぼくの帰りを待ってくれましたよ。ぼくを信用して、待っていてくれたんです。いちばんよく仕事のできる男でした。



写真2 工場で面接調査に応じるレシェクさん

* 管理部が新システムを導入した経緯について、シフェルチェフスキ工場のコンビナート研究センターのSWIERCZEWSKI氏（顧問級）は、われわれのインタビューに対してつぎのように説明している。
「より積極的で効果的な生産性を上げるためのシステムを、西欧の理論や実例を参考にしながら模索ましたが、結論としてはポーランドに独自の労働経済のシステムを作り出したのです。機械設備が旧態で、部品の供給も不十分、運転資金も欠如という状態、操業停止する企業もありましたし、管理部としては、自らの選択で自主的にグループを作らせ、そのなかで地位も決めさせるという方法をとりました。（自主性に任せることは）非常にリスクが大きいのですが、機械の保守や品質管理まで、だからも干渉されずにやれるシステムを導入したわけです。」



写真3 シフェルチェフスキ工場の外観

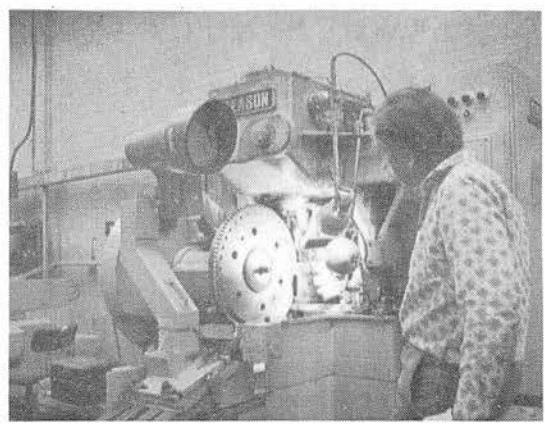


写真4 シフェルチェフスキ工場の内部

しかしこんどは研磨工を探さなくてはならないし、旋盤工も、フライス盤の熟練工も見つけなければならなかったんです。でももうみんなが、すでに（他のブリガード長に）選びだされていたんですね。ぼくのブリガードが、いちばん最後にできたわけですよ。そういうことだったんです。

そして、ほかのブリガードの頭たちは、みんなが材料を選びだしていたから、そのときは最悪の材料しか残っていなかったんですね。収益がぜんぜんあがらないような粗末な材料でした。加工でも旋盤でも、どの人に向かっても、みんながぼくに、

「いやいや、まったくお粗末な材料だよ。あなたのブリガードに入ったら、これじゃ、金が稼げないじゃないか」

といつていうんです。だから、ぼくは

「まあ、分かってくれよ。ぼくもまだ（ブリガードの）システムが、よく分からないんだ。分からぬけど、人間をなんとか選んで、お互に仕事をしあったら、なんとかなるはずだよ」

といってね。ぼくのブリガードに入る人を集めて、どういうものをどういう条件で生産するか、ということを説明することからはじめたんです。

まず社長のところへ行って契約書を交わしてから、仕事をしはじめたんです。ところが、問題はここから起りはじめたんです。例えば研磨工のはあいなんですが、ほかに研磨工がもう残っていなかったから、ぼくのブリガードでは研磨の仕事ができないわけですよ。そこでぼくは、ほかのブリガードのリーダー、（研磨の）仕事がよくできるブリガードに行って、

「この仕事を頼むよ。そのかわりに違う職種をやれる労働者がうちにいるから、その代わりにやってあげるよ」

と依頼して、ブリガードのリーダー同士が協力しあったわけです。最初のうちはお互に、ただで交換していたのですが、現在はやった仕事について、ちゃんと相手のブリガードに払います。

製品をいくらくらなければならないかが決まっていたから、その計画のもとで決まった仕事をしなければならなかったんですね。最初の1カ月は計画のとおり、245万ズウォーチの価値のあるものを生産する必要がありました。生産価格ですね。

ぼくらはすごく努力したから、280万の価値のあるものをつくり、最初の計画を超えたんです。2カ月も前から仕事をしていたほかのブリガードは、

「いったい、どうやってそんないい成績をあげたんだ」

と、気おくれしていましたね。（その理由を）簡単にいえば、ぼくは何年も前からマイスターとして仕事をしているし、仕事の心得があったからですよ。別のブリガードのリーダーたちは、以前はふつうの労働者として働いていたわけだから、どういうふうに仕事を組織すればいいのかわからなかったんですね。

＜以前にマイスターであった人は、みんなブリガードの頭になったのですか？＞

ブリガード制度になってからブリガード長は20人くらいですね。〔うちの部門にいた〕8人のマイスターは、みんながブリガード長になったわけではないんです。複雑ですが、現在は2つの部門が一緒になっているから数えにくいですね。

PR 8のマイスター4人のばあいは、みんなリーダーになりましたね。1人は前の制度で課長であった人、1人はぼくのように以前にマイスターだった人ですが、彼は病気で仕事を辞めて、のちに年金生活者(*)になりましたけどね。

その人は仕事を辞める前の86年にブリガードをつくり、2年間は仕事をしたんですが、心筋梗塞になって1988年に辞めてしまいました。とてもいいマイスターで、仕事もよく分かる人でしたよ。

かれのブリガードは、大きなブリガードの1つでしたね。彼は病欠になって退職してからは、そのブリガードが3つに別れたんです。彼のブリガードには60人以上の人人が入っていますが、PR 4とPR 8の2つの班が一緒になり、あわせて15のブリガードができたんですね。

＜マイスターの地位にあったひとで役職がなくなった人はおりましたか？＞

はい。以前はマイスターの地位で、現在はネジの研磨機を使って仕事をしている人がいます。その人はマイスターから課長になったことがあったけど、とてもすぐれたスペシャリストなのに、またマイスターに戻り、いまはただの労働者としてはたらいていますよ。

というのも、彼は管理部が決めたブリガード制の条件を受けたくなかったんですね。とくに経済的な条件があわなかったんです。生産計画が大きくて、それを果たせないのは確実だと思っていたらしいんですね。管理部ではその人と別の人気がブリガード長になると（そのブリガードの）生産計画を減らしてしまいましたけど…。

みんなは、彼が（条件を飲まずブリガード長になるのを辞退したことについて）、なにか被害にあったんではないかと推測していたんですね。

でも彼は、いまのままで満足していますよ。仕事は安定しているし、とくに心を煩わせることもなく、満足していますよ。（ブリガード長）より給料がいい、といっているくらいです。

もう1人、以前のマイスターで、ブリガード制がはじまったとき、電車に引き込まれて亡くなった人がいます。それから、リーダーにはなりたくないといって、工場を退職していった人が2人いましたね。

* 「年金生活者」の種類としては老齢年金・身体障害者年金・遺族年金などによるものがある。通常の労働者を対象としている一般年金の基本的な受給条件は、第1に雇用年数（男子：25年／女子：20年）と年齢（男子：65歳／女子：60歳）である。ただし重労働従事者や勲奨早期退職のばあいは、その条件は緩和される（吉野悦雄「ポーランドの労働概観」前掲書とくに85頁以下を参照）。

ています。まだ若かったんですがね。43歳か44歳くらいで。

以前に巣長〔マイスター〕であった人は、いまはだいたいブリガード長になっているけど、ふつうのヒラの労働者であった人でも長になった人がいるんです。それから、前に計画部に入っていた3人の女性は、いまリーダーになっていますね。そのうち1人は副部長を務めた人でね。

＜職場組織の改革のときブリガードはどのようにして選ばれたのでしょうか？＞

例えば心筋梗塞で年金生活者になった人のばあい、彼が病欠してからは、そのブリガードが分割されましてね。人が集団で仕事をするわけだから、互いに眺めながら仕事をしていると、だれが仕事を組織できるか、それが分かってくるんでしょうね。

信頼がおける人、仕事を組織できそうな人がいれば（仲間同士でその人にブリガード長になってほしいと）頼むわけです。頼まれた人が承知すれば、仲間から選ばれて、それを管理部が同意して契約が結ばれたわけです。

例えば（今までのリーダーが病欠で入院してから）、その大きなブリガードには女性のプラニスタ〔計画専門家〕がいて、ブリガードのリーダーの仕事を手伝ってくれるんです。

彼女がじつは一緒に（同じ職場の）仕事をして、なんでも分かっていたから、（ブリガード長も）自然に仕事を受け継いでリーダーになることができたわけです。もっとも、各ブリガードにプラニスタがいるのでなく、手がでる〔雇う余裕がある〕ブリガードがプラニスタを雇うわけですね。

＜最初にこの制度ができたとき何を期待しましたか？＞

（職場が）民主的になって、給料も上がることを期待しましたね。残念ながら、それは事実ですね。（残念）というのは、最初の1カ月目は、ブリガード制のもとで仕事をすれば、みんなの従業員の給料が50パーセントくらいは上がったんです。

しかしその最初の1カ月がたってみると、人が多すぎるばあいもあると考える人があらわれたんです。あまり働かない人、努力しない人を除外しても、一定の生産はできると思いはじめたんです。

そのときから失業させられる人があらわれたわけですね。ぼくのブリガードでは、そういう事態はなかったんですが、ほかのブリガードから追い出された人もいましてね。那些たちは退職したのではなく、ほかの部課に移されたんですね。失業させることはできなかつたんです。従業員が自分で辞めない限り失業はしませんからね。

ほかのブリガードで人が要らなくなったばあいは、人事部が同じ工場のなかで、その人の仕事を探すわけです。ほかの部課でも、ブリガードがつくられているところがあったから、人を必要とするばあいがあったんです。

例えば、ほかの部課のブリガードで旋盤工が必要なときは、ぼくが融通してやったんです。現在でも、1つのブリガードから別のブリガードに移りたい人と思っている人がいま

すよ。

1988年の終わり頃か89年の初めか、よく記憶していませんけど、多くの人たちがブリガードを変わりたがっていましたね。システム全体として移動は禁じられていたんですが。

というのは、どの従業員も、たくさん金を稼げるブリガードに行きたがっていたから当たり前です。もしリーダーが従業員1人を辞めさせたばあい、その従業員がもらうはずの給料は、そのブリガードの財産になるんです。

それはぼくのブリガードにとっては得なことになるわけで、ぼくは辞めさせたことがなかったんですが、でも例えば、もしブリガードから人が追い出されたら、その人が（稼ぐはずの）お金がブリガードのなかに残っただろうと思います。

ほかの従業員が努力すれば、去ってしまった人の分がもらえる、つまり収入があがることになりますよね。ブリガードの人員が少ないほど、収入は上がるわけです。もちろん計画は果たさなければならないわけだけど。

＜現在いちばん解決すべき問題はどのへんにありますか？＞

工場（で面接調査を受けたとき）でもお話ししたのと同じ質問ですね。最初にいちばん基本的なことで問題になるのは、やはり原料のことですよ。それに発注や梱包などの問題がいちばん大事ですね。そのうえにもうひとつ問題なのは。機械が古いということですかね。

むかしマイスターの頃、病欠者が出了問題もあったけど、いまは病欠者のケースはほとんどありませんね。もう死にかけた状態で仕事を休むことがない限り、病欠はいま問題になりません。（もっともブリガード長である）ぼくのばあいは、経済的な理由は別にして、病欠でもすれば、ブリガードの仕事をコントロールできなくなるでしょうが…。

マイスターの頃はプラニスタもいて、仕事を統制してくれたり、仕事の組織を手伝う人もいたから、マイスターも静かに机に座わって、一服することができたんですがね。いまはぜんぜん暇がありませんね。工場を走り回ったり、なにがどこにあるかを調べたり、従業員がどういうふうに仕事しているかをチェックしたり、ときどき自分でも物を運んだり、職場に出ることもありますね。残念ながら、それは事実なんです。

連帯の運動にかかわって

ぼくは「連帯」のふつうの組合員でしたね。組合員になったのは1980年。マイスターとしては働いていたとき、デモがあったときは、デモにも参加しましたね。

1980年当時は、連帯の組合に大多数が加入したんですが、いまは40パーセントくらいですかね。当時は従業員の80パーセントくらいが加入していましたからね。ワレサさんは労働者のために、労働者の自由ために戦いました。

＜なぜ半分に減ったんでしょうね？＞

労働者の1部は独立労組「連帯」に入りましたが、81年に連帯が解散させられたときの

ことがありますから(*)、連帯の支持者でありながら、その後は連帯に入らず、情勢を見守っていましたね。

いまではこの1、2年の間に労働組合が解散するのではないかと心配なんです。しかしほくは連帯のファンだから、支持してますよ。（いま連帯に入っていない人は）81年の経験があるから、連帯の解散を心配していますね。ヤルゼルスキ（JARUZEKSKI）が解任されることを待っているんです(**)。

ヤルゼルスキの経済計画がうまく実現するかどうか、みんな見守っています。この計画は、ヤルゼルスキの計画の第1着手でしたからね。みんながこの計画に反対したら、こんどはどこの組合に入るんですかね？

まもなく、もういちど新しい組織が生まれるとしても、また（その組織に）みんな落胆するんだろうけど…。

ぼくはずっと連帯の方向は正しいと思っていますよ。すこし支持しています。いま人びとは長期間、OPZZ〔官制労組〕(***)が統治していたことにやきもきしていますからね。こういう組合に1部の人だけ入って、その組合の活動を用心深く観察してましてね。それはほんとに、第2の政党のようなものでした。

いまOPZZに所属しているのは、工場全体で20パーセントくらいかな。むかしからOPZZ属している人もいますよ。連帯が生まれたときでもOPZZに属してた人が。〔共産党解散の〕最後の日、共産党員は200万人いました。統計にもありますけど…。当時はたくさん的人が連帯に加入しましたね。

＜連帯に入る前、レシェクさん、あなたは共産党政権をどうみていましたか？＞

共産党の方針はよかったと思っていましたが、ギエレク〔GIEREK〕(****)を解任したときは、目が覚めましたね。そのときまでは、そう考えていませんでした。ぼくたちは、ギエレクを高く評価していましたからね。

ぼく、（共産党政府の活動は）すべてよかったと思いました。ギエレクは、美しい言葉を言って、それはすべてよかったんですが、ギエレクがそんな大きな借金をしたということは誰も知りませんでした。ギエレクは1976年に辞めて、かえって高く評価された

* 「81年に連帯が解散させられた」というのは、戒厳令下の事態をさしていると思われる。自主労組《連帯》が実質的に解散するのは、1982年10月8日、ポーランド国会が議決した新労働組合法の成立によってである。新労組法は連帯、政府系旧労組、中立労組のすべてを一律に解体し83年1月から工場レベルに限定して再生労組としての登録を許可した。新労組法はポーランド統一労働者党との協力関係を義務づけつつ、連帯の解消（非合法化）をねらったものとされている。

** ヤルゼルスキ氏は軍人の出身。国防相を務めたあとカニア政権のもとで首相に抜擢された。統一労働者党の稳健派と目され、1981年10月に第一書記に選出された。

*** OPZZは1982年10月の新労組法を契機として1984年に設立された共産党系労組。1988年に労働法典が改正されるまでは保守派。1988年からは連帯労組の復活により主導権を連帯に譲った。

**** 前共産党第一書記GIEREKは、ポーランド人が外国旅行をできるようにしたり、コーヒー・バナナなどを輸入し消費者に安く提供、店舗は商品であふれるなど自由な時代を実現したという。

人でしたね。かれは1970年から74年まで、人びとを覚醒し、本当の生活の送り方を示した人なんですよ。

ワルシャワのスタジオン・レシア10番街(STADION X-LECIA)で、デモがありましてね。ヤロシェヴィッチ[JAROSZEWICZ] の命を助けるため、いろいろな共産党員が解任させられていきました。

もしいま、共産党があったら、ヤロシェヴィッチの記念碑を建てるかも知れないな。

〈 1980年ころ、工場ではどのような経験をしましたか ? 〉

1、2時間もかったストライキがよく起きましたね。ポーランドではなにかが起こると、よくストライキをやりましたよ。ストライキはいつも国の状態に関係があったから、たいていは全国的なストライキになりましたね。

1981年の12月15日、(工場では) 全面的なストライキに入ったんです。〔その前の12月13日に〕ヤロシェヴィッチ将軍が工場に戒厳令を発表しましてね。15日になって、工場で全面的なストライキが起きました。(工場の建物の) 占領ストライキです。

[非常事態宣言があった] 13日は日曜日でしてね。土曜日にストライキを発表し、14日の月曜日には座り込みのストライキがはじました。そのストライキは一日中続きましてね。朝6時から翌日の朝の3時まで。

(スローガンは) 「連帯を再び組織せよ!」と。

軍隊や警察は、労働者を(威嚇しないで) ただだまって工場から連れ出しました。工場の門の前に車が駐車し、軍隊は網を張った鉄の塀を切って、工場の向こう側に張ってきたんですね。ZOMO [ポーランド警察本部隊] は俗悪なことばを吐いて、労働者に(早く外に出ろと) 押しやってたけど、たいした抗争はありませんでしたね。

ぼくは朝から1時までストライキに加わってたんですが、14日の午後1時半ころ、工場を出て家に帰ったんです。妻が家におらず、子供が、娘一人を家においていましたから。だからそのストライキには参加しないで、工場から出たんです。

労働者のなかには、〔連帯の活動を封じ始めた〕12月13日に拘禁された者もおりましたね。

共産党政権は、連帯の活動を法律に従って撲滅したわけです。82年からはストライキはありませんでした(*)。

いまの政府に期待することは、不景気に勝つことですよ。国の借金をなくし、インフレをなくすことですね。

この1月までインフレは激しかったんです。その1月から2月にかけてはインフレを止められたけど、また …(**)。

きのうは失業者が17万人いると聞きました。

* 戦前から今日までのポーランドの政治・社会情勢を略記すれば、ほぼ次頁のように推移した。

-
- 1918 ポーランドは3国分割から独立を獲得した。
 - 1939. 9. 1 ドイツ軍が進攻し、第2次世界大戦が勃発。
 - 1944. 8. 1 ~10. 20 ワルシャワ蜂起
 - 1945. 8. 15 第2次世界大戦の終結。やがてソ連軍の進駐が開始され、1970年までスターリン体制下に入る。
 - 1980 ~1981 自主労組《連帯》の政治運動が展開される。
 - 1981. 9. 25 国有企業従業員集団自管理法が成立。
 - 1981. 12. 13 ヤルゼルスキ政権のもとで戒厳令を導入。
 - 1982. 10. 8 労働組合法の成立でストライキ権が法制化された。
 - 1984. 11 全ポーランド労働組合同盟《OPZZ》が結成された。
 - 1986. 11. 24 労働契約法が成立した。
 - 1988. 春と8月に《連帯》の合法化を求めて波状的なストライキが続いた。
 - 1989. 2. 6 いわゆる《円卓会議》が開催されポーランド統一労働者党と連帯の各代表が会した。
 - 1989. 4. 5 円卓会議が締結。
 - 1989. 4. 13 ワルシャワ県裁判所は《連帯》の登録を決定し、労働組合複数主義が実質化した。
 - 1989. 9. 東ヨーロッパ初の自由選挙で《連帯》主導の国民連立政府のマゾビエツキ政権が誕生した。
 - 1990. 12. ワレサ氏が大統領に選出された。
- ** このインタビュー当時のインフレは厳しく、われわれが滞在中に電車・バス賃は2倍、タクシ代は100倍に膨れあがり、飲食店のメニューも毎日書き換えられた。

2 刻まれた葛藤

●ある母と娘の戦争体験



写真5 話者とその家族(右ステファニア／3人目エリジビエタ／他はエリジビエタの息子の家族)

【口述者】

○母／リンケヴィッチ・ステファニア 1923年3月、ワルシャワ県ヴォラ区の生まれ。1944年8月から9ヶ月間ベルリンで強制労働に従う。戦後は図書館・集会所に勤務。ワルシャワ市マルコ・ボーロ地区在住。長女の息子夫婦・ひ孫2人の4世代家族の一員。

娘／エリジビエタ・ズィリンスカ 1940年9月、ワルシャワ県プシャスニシュ市の生まれ。ステファニアの長女で幼稚園勤務。

○収録

1930年3月1日・3日・7日 お二人の自宅で。

パートⅠ：母

16歳の花嫁

わたしが生まれたのは1923年、ワルシャワのヴォラという地区でした。いまはもう67歳で、年金をもらって暮らしているんですよ。ヴォラはワルシャワのふるい町、下町ですね。たくさんの工場があって、労働者もたくさん住んでいました。

いまのヴォラはすごく変わっているけど、わたしが住んでいたところは、現在はぜんぜん家がありません。つまらない地区…。

そこは労働者だけが住んでいた地区で、ひどいところだったのよ。戦争前も戦後も、大きな駅がたった一つあったから、大事なところでしたけれどね。ワルシャワの中心ではなけれど、工場があったからとても大事なところ…。

わたしの家族も労働者でした。父は市内を走っている電車の関係の仕事をして、戦時中は電車の運転手をしていましたよ。お母さんは主婦専業でしたけれど…。

は電車の運転手をしていましたよ。お母さんは主婦専業でしたけれど…。

〈おばあちゃんは若いころ、夫になる人とどのようにめぐり会ったの？〉

夫はヴィルノ〔ウォトファニアの首都〕という町の生まれでね。休暇をとりましてヴィルノからワルシャワへ遊びにきていたんですね。はじめて会ったとき、わたしはとても若かったのよ。まだ16歳。夫は9歳年上ですから、25歳でしたよ。

その夫となる人とワルシャワで知り合い、好きになって結婚したのよ。若くて結婚したから、〔傍らにいる長女のエリジビエタさんを指して〕いまこんなに大人の子供がいるというわけ。

結婚式をあげたのが1939年でしたね。結婚したその年は、ちょうど第2次世界大戦が勃発した年だったの。それは結婚してから2カ月後の9月1日のことでした。はじめての出会いから結婚までは、とても短かかったわけですね。夫と知り合ったのが3月で、7月には結婚式をあげましたから。

16歳で若かったから、わたしの両親は結婚に反対でしたよ。その当時、女の子が早く結婚したり、夫婦の年齢がけっこう離れていたのはふつうでしたけれど…。

両親は夫のことをよく知らなかったので、結婚に反対していたんです。でも夫のご両親は反対しませんでした。夫のお父さんは結婚式にも出てくれました。

わたしの両親は、じつは別の婚約者を選んで、その人と結婚させたがっていたんです。両親が希望した人は、たいへんお金もちの人でした。何件ものお店や、何件もの家の持ち主でしたからね。

洋服生地店が3件と家が2件でしたか、その家は大きくて、アパートとして貸していました。でも、わたしの選んだ相手は貧乏でした。

夫はヴィルノの軍隊に属していました。そこで音楽家、音楽隊の指揮者をしていましたんですよ。2、3年の兵役義務で軍隊にいたわけではなく、職業軍人だったのね。夫はワルシャワにいるお友だちのところを訪ねてきて、ワルシャワでわたしを知ってからは、もうヴィルノへは戻りませんでした。

（傍らから娘のエルジビエタ）「お母さんがヴィルノに行きたくなかったのよ。ヴォラには家族全員が住んでいましたからね。」

（ふたたびステファニア）夫の両親のことは、よく知りませんでした。お母さんとはじめて出会ったのは、夫が亡くなつてから後でした。

夫の母親という人は自分の娘と一緒に暮らしていて、その娘の世話をになっていたんです。だから、わたしが世話を必要はなかったんです。

〈結婚生活でいちばん幸せであったこと、辛かったことはなんでしたか？〉

幸せなことといえば、すてきな生活できたことですね。それに、子供が健康に成長したことでしょうね。最初の子供が生まれたのは結婚して1年3カ月後で、1940年でした。その妹は1944年。2人ともワルシャワ（県）の自宅の家で生まれました。

ワルシャワ蜂起(*)のときに主人が死んでしまって、わたしたちの夫婦生活は5年しか続かなかったから、女の子が2人だけでした。もし戦争や蜂起のことを話せば長くなりますけど…。

〔子供たちは〕ワルシャワ市街から100キロ離れている、当時のプシャスニッシュという町で2人とも生まれたんです。

そのころ子供はわたしが一人で育てました。戦争が終わってからは、仕事につかなければならなかったから、母に手伝ってもらいましたけれど。

〔二人の娘のうち〕一人はこの娘〔傍らにいるエリジビエタ〕で、もう一人の娘はいまブルドゥノ地区に住んでいます。この娘には息子がいますが、娘は体が不自由。心筋梗塞になってもう年金生活に入っているんです。

この娘〔エリジビエタ〕は明るい子で…。

(エリジビエタ)「そう。お化粧したり、カーテンを使ってウェディングドレスを作ったりしたわ。」

(ステファニア)そのとおりよ。

(エリジビエタ)「よくお尻をたたかれたものね。」

(ステファニア)辛かったのは、主人との関係がなかったこと。ワルシャワ蜂起で夫を失い、わたしもドイツへ行かされたこと。それは、ずっと恐ろしい時期でした。夫がAK〔AIMIA KRAJOWA〕(**)の軍人だったので、とても怖かったです。

ドイツ人がよくどこかに、人を連行して行きました。家にはいろいろな書類がありましたから、ドイツ人がこないかどうかと、いつも窓から外を確かめていました。子供が小さかったし、それがとても怖かったです。

強制労働へ

ワルシャワ蜂起がはじまるちょっと前、わたしの母と上の娘は一緒にノヴェ・ミヤストの町へ行きました。下の娘をキャンプへ連れだすちょっと前、ちょうど3日前でしたけど、上の娘はそのおばあちゃんと一緒に、ちょうど夏休みで、例年と同じようにワルシャワを出て親戚の家へ遊びに行っていたのです。

そのあいだにドイツ人がベルリンの労働キャンプに、わたしと下の娘を連れ出したのです。その偶然で家族が別れ別れになってしまいました。このエリシビエタの面倒は、その

* ワルシャワ蜂起は1944年8月1日から10月2日まで63日間にわたり、ポーランドの国内軍AK〔次の注(**)を参照〕は、首都ワルシャワを占領するドイツ軍に対する武装蜂起を決行した。市民もこの市街戦に巻き込まれて一般市民の死者18万人、収容所送検5万人、強制労働送り15万人を数えた。ほかに蜂起軍の死者は1万8000人、捕虜1万5000人といわれる（松本照男『戦争と占領：あるポーランド家族の体験』岩波書店、1989年、48頁を参照）

** 秘密軍隊。ポーランド政府は大戦中の1939年11月、ロンドンに亡命政府を構築した。ポーランドに残った軍人たちは、ドイツ軍が進行後の1940年ころ地下組織の国内軍AKを設立。AKはロンドンの亡命政府の指揮下にあった。

おばあちゃんがずっとみていました。

その年、母たちは日曜日にノヴェ・ミヤストへ行きました。ワルシャワ蜂起がはじまつたのは、その週の水曜日〔1944年8月1日〕です。ワルシャワは爆破され、わたしは蜂起後に子供と一緒に、ベルリンのシュパンダウにある労働キャンプに行かされました。

そのキャンプにはワルシャワ蜂起のときから、ずっと戦争終わるまで、1944年の8月から翌年の5月9日まで9ヶ月くらいおりました。強制収容所は人を殺す所ですけれど、労働キャンプはわりと自由で、門（かんぬき）もされていませんでしたね。

みんながキャンプのなかで、はたらいていたわけではありません。キャンプのなかに残こったのは少しだけで、あと大勢はキャンプを出て仕事をしていました。

わたしはキャンプのなかで、大きな木材を細かく割っていました。とても重労働でしたよ。仕事はやらされるままにやりましたからね。わたしはただその大きな木を細かく割ったり、キャンプの掃除もしました。

わたしの仕事は工場ではないんです。工場はキャンプの外にありました。ほかの女たちはキャンプを出て、そこの工場まで行き、毎日その工場で仕事をしていました。その工場というのは弾薬をつくっている工場でした。

だれかが大きな木を運んできたとき、わたしはその大きな木をその場所から自分の所まで運び、木を並べて鋸で切るんです。それから斧でたたき切って、その木をもっと細かく割ります。それからその細かく切った木を、だれかが違う場所へ持って行きました。

ときどきはだれかが、その細かく切った木を少し置いていました。その木をストーブに燃やし、キャンプの暖房用として使われました。でもその木を燃やしただけでは、お湯を沸かしたりお料理をすることなど、とてもできませんでした。

料理をつくるのもお湯を沸かすのも、みな禁止されていたのね。もちろんお湯を沸かして子供の体を洗うことなど、とてもできませんでしたよ。そういう仕事はみな外でしていたのです。わたしのところには暖房はありませんでした。

わたしがベルリンの労働キャンプで仕事しているとき、4ヶ月の赤ちゃんはバラックに残されたままでした。子供の面倒を見るために看護婦さんが一人いましたが、バラックのなかには100人も子供がいたわけですから、実際にはだれもその赤ちゃんの面倒をみなかつと同じでしょうよ。

だからわたしが仕事をしているあいだは、その4ヶ月の赤ちゃんの世話をだれしませんでした。それでもその娘は、いつも一人で置いたままなのに、よく生きててくれたものね。

キャンプのなかにいる子供たちは、みな大人と一緒に同じものを食べていました。キャンプにいる間は、ずっと同じ食べ物でした。黒パンを食べ、麦で作ったコーヒーを飲んでいたんです。

もちろんわたしの赤ちゃんも同じ食べ物を食べていました。わたしが仕事から帰ってきて

たときは、赤ちゃんはいつも、とっても汚っていました。足から頭のてっぺんまで、からだ全体がとても汚っていましたもの。

バラックのなかでは、ベッドみたいものに寝ました。その板の上に布団を置いて、毛布を掛けて寝ていたんです。キャンプのバラックにはロシア人、ウクライナ人。そうウクライナ人の女がいましたね。

いろいろな国の人々が、労働キャンプで仕事をしていました。違う国の人々は違う部屋で寝ていました。ウクライナ人は3階のベッド…。

キャンプのなかは自由に歩くことができましたね。ポーランド人は胸にP、ロシア人はR、フランス人はFというように、それをみれば国籍がわかりましたよ。

＜その子供たちはどこにいましたか？＞

親が仕事に出かけるとき、子供はみなそのキャンプに置いていきます。子供をキャンプのなかに残して、みんな仕事へ行っていました。子供たちは、一つのバラックのなかに集まっていました。

そこに、看護婦さん一人で100人の子供たちの面倒を見ていたわけです。そのバラックは別に〔子供用の〕特別な部屋ではなくて、私たちが住んでいたバラックに、キャンプの子供たちが全員集まって、そこに看護婦さんが一人いたんです。

そんなふうに子供たちを置いといて、そのお母さんたちが毎日仕事へ行っていました。はたらく時間は8時間で、朝は6時から午後2時まででした。そのバラックのなかには100人くらい住んでいて、食事は1日3回、朝ご飯と夕飯だけでしたよ。

麦で作った黒いコーヒー、それに黒いパン。お昼ご飯にはカブラという野菜がありました。わたしのところに、戦争中のいろいろな書類が残っています。身分証明書、それからこれ(*)は、わたしがベルリンのキャンプではたらいたときの労働の記録です。記録は1944年の10月の労働日数、給料などですね。

* 右にその資料を示す。

Wochen		Arbeitszeit Std.'e u. Min.	Stunden	Lohn	Verdienst Hilfslohn	Verpflegung	Übersch.
1	6	76					
2	6	71					
3	6	55					
4	7	32					
5	7	32					
6	7	32					
7	7	32					
8	7	32					
9	7	32					
10	7	32					
11	7	32					
12	7	32					
13	7	32					
14	7	32					
15	7	32					
16	7	32					
17	7	32					
18	7	32					
19	7	32					
20	7	32					
21	7	32					
22	7	32					
23	7	32					
24	7	32					
25	7	32					
26	7	32					
27	7	32					
28	7	32					
29	7	32					
30	7	32					
31	7	32					
32	7	32					
33	7	32					
34	7	32					
35	7	32					
36	7	32					
37	7	32					
38	7	32					
39	7	32					
40	7	32					
41	7	32					
42	7	32					
43	7	32					
44	7	32					
45	7	32					
46	7	32					
47	7	32					
48	7	32					
49	7	32					
50	7	32					
51	7	32					
52	7	32					
53	7	32					
54	7	32					
55	7	32					
56	7	32					
57	7	32					
58	7	32					
59	7	32					
60	7	32					
61	7	32					
62	7	32					
63	7	32					
64	7	32					
65	7	32					
66	7	32					
67	7	32					
68	7	32					
69	7	32					
70	7	32					
71	7	32					
72	7	32					
73	7	32					
74	7	32					
75	7	32					
76	7	32					
77	7	32					
78	7	32					
79	7	32					
80	7	32					
81	7	32					
82	7	32					
83	7	32					
84	7	32					
85	7	32					
86	7	32					
87	7	32					
88	7	32					
89	7	32					
90	7	32					
91	7	32					
92	7	32					
93	7	32					
94	7	32					
95	7	32					
96	7	32					
97	7	32					
98	7	32					
99	7	32					
100	7	32					
101	7	32					
102	7	32					
103	7	32					
104	7	32					
105	7	32					
106	7	32					
107	7	32					
108	7	32					
109	7	32					
110	7	32					
111	7	32					
112	7	32					
113	7	32					
114	7	32					
115	7	32					
116	7	32					
117	7	32					
118	7	32					
119	7	32					
120	7	32					
121	7	32					
122	7	32					
123	7	32					
124	7	32					
125	7	32					
126	7	32					
127	7	32					
128	7	32					
129	7	32					
130	7	32					
131	7	32					
132	7	32					
133	7	32					
134	7	32					
135	7	32					
136	7	32					
137	7	32					
138	7	32					
139	7	32					
140	7	32					
141	7	32					
142	7	32					
143	7	32					
144	7	32					
145	7	32					
146	7	32					
147	7	32					
148	7	32					
149	7	32					
150	7	32					
151	7	32					
152	7	32					
153	7	32					
154	7	32					
155	7	32					
156	7	32					
157	7	32					
158	7	32					
159	7	32					
160	7	32					
161	7	32					
162	7	32					
163	7	32					
164	7	32					
165	7	32					
166	7	32					
167	7	32					
168	7	32					
169	7	32					
170	7	32					
171	7	32					
172	7	32					
173	7	32					
174	7	32					
175	7	32					
176	7	32					
177	7	32					
178	7	32					
179	7	32					
180	7	32					
181	7	32					
182	7	32					
183	7	32					
184	7	32					
185	7	32					
186	7	32					
187	7	32					
188	7	32					
189	7	32					
190	7	32					
191	7	32					
192	7	32					
193	7	32					
194	7	32					
195	7	32					
196	7	32					
197	7	32					
198	7	32					
199	7	32					
200	7	32					
201	7	32					
202	7	32					
203	7	32					
204	7	32					
205	7	32					
206	7	32					
207	7	32					
208	7	32					
209	7	32					
210	7	32					
211	7	32					
212	7	32					
213	7	32					
214	7	32					
215	7	32					
216	7	32					
217	7	32					
218	7	32					
219	7	32					
220	7	32					
221	7	32					
222	7	32					
223	7	32					
224	7	32					
225	7	32					
226	7	32					
227	7	32					
228	7	32					

敗戦のなかで

くその4ヶ月の赤ちゃんはお母さんと一緒にキャンプにいましたけど、上の娘つまりエリジビエタさんはその間どこにいたのですか？>

(エリジビエタ) 「わたしはおばあちゃんと一緒にポーランドにいました。おばあちゃんということはわたしの母のことですが…。」

そのおばあちゃんと一緒にポーランドに残っていました。そのときはお母さんと別れて、運がよかったです。お母さんがキャンプへ行ったのは妹だけです。わたしはおばあちゃんと一緒に、ワルシャワに残っていました。」

(ふたたびステファニア) わたしは8月から翌年の5月までキャンプにいて、終戦の5月にワルシャワへ戻りました。ワルシャワは壊されて、焼けていました。戦争は終わっていました。最初は戦争の前に家族が住んでいたヴォラへ行きましたけど、その家が戦争でぜんぶ壊されていたんです。

ワルシャワは〔戦火に遭い〕石だらけで住むところがなかったから、赤ちゃんと一緒にオブジブフという小さな村の、ちょっとした知り合いの家へ泊めてもらいました。

それから自分の母と上の娘がいた所行きました。そこもぜんぶ壊されていました。母の家があった場所に紙が貼ってあったのです。前に母が住んでいたところに張紙があって、「わたしはノヴェ・ミヤストにいます」

と母の字が書かれていて、そんなふうに〔消息を〕教えてくれたの。

ワルシャワへ帰る人たちは、別れた家族とこうして連絡をとっていたんですね。

それを読んでからすぐわたしはポーランドの赤十字に行って、交通無料の証明書をもらいたいとお願いしました。そのとき、

「わたしはノヴェ・ミヤストに住んでいます」

といいました。無料の切符をもらうためには、そう嘘をいわなければならなかったんです。そういわなければ、母の住んでいるところへ行けなかったのです。すぐにそこへ向かって、母と娘に会いました。1週間はそこにいました。

そのとき母のところまで行くお金は、ぜんぜんありませんでした。この証明書は無料切符の代わりのもので、これを見せると無料で乗物に乗ることができたんです。

〈ステファニアさん、いろいろ無理にむかしのことを思い出させてごめんなさい〉

いえいえ。これがその無料の切符をもらう証明書です(*)。日付は1945年7月6日で、わたしの番号は26682…。

〔労働キャンプから〕ワルシャワへ帰ったのは5月〔9日〕ですから〔2カ月後ということがあります〕。

* 次頁にその「証明書 26682」の現物コピーと訳文を示した。

Warszawa, dnia... 6.VII.45
Piase XI Nr.24

Zawiadomienie 26682

POLSKI CZERWONY KRZYŻ
ZAKŁAD GŁÓWNY
BIURO INFORMACYJNE

Do Biura Informacyjnego Czerwonego Krzyża zgłosił się
Rynkiewicz Stefan...
podejrzany, że urodzony jest 10.III.1923...
stale zamieszkał w Nowe - Miasto...
powraca z przykutowych robót z Berlin - Spandau.

Wszystkie właściwe wojskowe i cywilne proszone są o ułatwienia
wymienionego... podróży i o udzielenie bezpłatnego przejazdu.

DYREKTOR P.C.K.
S. Górczyński
Dr. Wl. Górczyński



ワルシャワ, 日付 1945年7月6日
番号11-24

ポーランド赤十字協会
中央情報局

証明書 26682

赤十字情報部に依頼があった、その当人の名は、
リンケヴィッチ・ステファニア
当人によると生年月日は 1923年 3月10日
本籍地は ノヴェ・ミヤスト。
強制労働から帰還 ベルリン・シュパンダウから
すべての軍隊と政府（地方自治体を含む）は上記の者に対し、旅行が容
易にできるよう無料通行をさせるように。

ポーランド赤十字長
署名
W・ゴルチスキ

資料2 ステファニア用の無料通行証明書

戦争の後は、赤ちゃんの世話をだけでなく、上の娘と母の面倒をみることになりました。ノヴェ・ミヤストの家に1週間くらいから、赤ちゃんと上の娘を残してワルシャワへ行って、どこか住むところを探しはじめたんです。

もしどこか住むところが見つかれば、つぎは仕事を探さなければならない。ワルシャワで仕事とか夫の情報のことを探そうと思いました。

最初は戦争の前に夫がはたらいていたMZKという会社に行って、夫のお友だちと会いました。というのも、夫の消息や自分の仕事のあてを探す必要があったからです。

そのときわたしは夫のことについて、なにか知らせがないかどうか聞きました。そのときわたしは、夫の消息をまだ知りませんでした。そのお友だちの一人は、

「もうあなたの夫は死んでいます」

とおっしゃるのです。でもほかの人は、

「いや、生きていますよ」

というふうにいいますし、いろいろな知らせ、はっきりしないしない知らせが耳に入ってくるんです。わたしは〔とりあえず〕、

「アパートがどこかにありませんか？ 借りても買ってもいいのですが…」

とその人たちに聞きました。わたしの母はずっとポーランドにおりましたから、お金はもっていました。夫の友だちは、

「一つ売りに出ているアパートがあります」

といってくれましたが、そのアパートは戦争の前に建てはじめて、戦争が終わってもまだ完全に住める状態ではなかったんです。

もう一つのアパートはちょっと汚くて、壊されていましたけど、すこし直せばなんとか住むことができる状態でした。

でもわたしは、

「屋根があればいいの。雨水が頭にポツンポツンと落ちなかったら、それでいいですよ」といって、そのアパートを見にいったのよ。部屋は一つだけ…。そこには大きな窓がついていましたが、板が打ち付けてあって、一つの窓だけは窓ガラスがついていたんです。

台所には粘度で作ったような暖炉、それにお料理をする台所がありました。トイレは外でしたね。もちろん水道もなかった…。

さっそくアパートの持主と話をしアパートの値段を決め、区役所のようなところで登録しました。それから母と子供たちをワルシャワへ連れ戻すために、いったんはノヴェ・ミヤストへ帰り、それからワルシャワの新しいアパートへ移ったのです。

アパートには寝るベッドはなし、テーブルもなかったので、母のお金で少しづつ古道具を買ってきました。小さい子供がいましたから、〔冷たい〕床で寝ないようにと、古いベッドを買いました。

あとでほかの人が入居してから、みんな自分たちの力で、住居の周りなどを直したり、

お金を町に払って水道もできました。

＜戦争が終わってから、子供を育てるときなにがいちばん大変でしたか？＞

下の娘が病気で、お医者さんの話ではたぶん死ぬだろう、とわたしにそういわれたんです。赤ちゃんは栄養失調で、皮と骨だけの状態でしたからね。とても強い栄養失調にかかっていたんです。

赤ちゃんのからだはとてもデリケートで、とても弱っていました。それに哺乳瓶にも慣れていませんでしたし、ふつうの赤ちゃんが食べる食べものにも慣れてませんから、その病気を治すのがいちばん大変なところでしたね。

ふつうに食べられるようになるまで、1年間はかかりました。ほかにも、ふつうの子供がかかるいろいろな病気もしました。

このころは心臓発作を起こしたことあったんです。当時わたしは、2人の娘とそのおばあちゃんと、4人で暮らしていました。

そのときは子供のためにはたらこうと決心しましたから、再婚のことはまったく考えませんでした。

強制収容所で殺された夫

＜ところでワルシャワへ戻られて、ご主人の消息をどうやって知りましたか？＞

夫はワルシャワ蜂起がまだ終わらないとき、ワルシャワ蜂起で戦って捕虜になり、強制収容所に連れられていきました。

ドイツ人の捕虜になって、ベルリンのザクセンハウゼン (SACHSENHAUSEN) の収容所に入れら、すぐにブッヘンワルト (BUCHENWALD) の強制収容所に移されたんです。夫はその収容所で殺されました。書類によれば1945年2月9日のことです。

＜ご主人はAKのどの部隊に入っていたのですか？＞

ポーランドの全体が小さなグループに別れていました。小部隊に…。

主人の小隊はオホタ地区で戦っていたんです。夫の友人は、夫がどの小隊に属していたか教えてくれました。

AK時代の夫の名はエレヴ (ELEV) といいましてね。収容所での仮の名前だったんです。

1946年ポーランド赤十字協会から、夫の身分証明書などがブッヘンワルト強制収容所で見つかったので、それを取りにきてほしいという通知がきたんです。

夫がつかまつたときにもっていた書類、例えば学校の卒業証明書、身分証明書などですね。

身分証明書はみんながもっていた証明書ですから、いつも携帯しなければなりませんでしたね。ドイツ人の軍人に話しかけられたら、かならずそれを見せなければなりません。

これが赤十字からきた夫の死亡通知書です(*)。夫の番号は84460。1945年2月9日、ブッヘンワルトの収容所で亡くなったという知らせでした。

* ポーランド赤十字協会から送付された死亡通知書の現物コピーと訳文を下に示す。

Wysyłamy do pana Rynkiewicza Stefanię
z Warszawy, Częstochowska 24-14.
Wysyłamy do pana Rynkiewicza Antoniego
z Warszawy, dnia 14 GRUDNIA
Piusa XI-Nr. 24.

Wysyłamy do pana Rynkiewicza Stefanię
z Warszawy, Częstochowska 24-14.
Dot. Rynkiewicz Antoni.

W odpowiedzi na zgłoszone przez WPanią poszukiwanie
Rynkiewicza Antoniego, donosimy z żalem, iż wg. posiadanych
informacji RYNKIEWICZ Antoni - muzyk - ur. 29. IV. 1916 r. przybył
dn. 8. IX. 1944 r. z Sachsenhausen do obozu koncentracyjnego
w Buchenwald, nr. w. 84460, gdzie zmarł dn. 9. II. 1945.
Łączymy szczerze wyrazy współczucia.

AN/II.C.

W Kierownik Biura
Anna Krzyżanowska
M. Bartrowska /

 ポーランド赤十字協会 中央情報局	ワルシャワ 日付 12月12日
リンケヴィッヂ ステファニア 様 <u>ワルシャワ チエストホフスカ通 24-14</u>	
<u>リンケヴィッヂ・アントニに関して</u>	
貴台が依頼された搜索については、遺憾ながらつぎのとおり 報告します。本部にある情報によると、リンケヴィッヂ・アン トニ音楽家は1916年4月29日生まれ。1944年9月4日、ザクセン ハウゼン強制収容所からブッヘンワルトの強制収容所にきました。 番号は84460。1945年2月9日に死亡しました。 心からお悔やみを申し上げます。	
局長 署名 M.ボルトノウスカ	

資料3 夫の死亡通知書

〈ステファニアさんは、それから仕事を探すことになるのですね？〉

赤十字からわたしの夫、もう死んでいるという知らせがきてから、はたらくことを決めて、自分の仕事を探しはじめたんです。夫が勤めていた会社へ行って仕事をもらいました。その仕事をもらうために、夫のお友だちが助けてくれたのです。

それはMZKという会社の事務所で、わたしは22歳から頭脳労働者としてその事務所ではたらくことになりました。

MZKはバスや電車の交通機関をもち、ワルシャワ市街で運送サービスをしている会社です。郊外の交通機関もやってます。わたしそこで、会社附属の図書館ではたらいていました。

図書館ではMZKではたらいている人とか、その労働者の家族が本を借りたりするのを世話していました。のちに会社の集会所の館長としてはたらきましたよ。

集会所の責任者としてMZKの労働者のために外国語の言葉の教室を開いたり、労働者の劇団、楽団、音楽のサークルを作ったり、いろいろな文化活動をしていました。ダンスのグループも作りましたね。有名な先生を呼んで講義、講演もやりました。

その図書館では10年くらい、集会所では15年くらい勤めまして、そのあとは社長室に移ります。そこでは報告者として、仕事を辞める人たちのいろいろ面倒をみていました。

例えば、誰かはたらいている人が辞めることに決めたときは、今までの給料を数えたり、あの人は会社に借金していないか、その人は制服をちゃんと返したかどうかとか、今まで会社で使ったものとか、それをいろいろ調べるんです。

1年間の定期がどうなっているとか、まだ残っているばあい、その人は残った定期分を返さなければなりませんからね。そんな計算もしました。この会社の仕事がわたしの最初で最後の仕事でした。

〈ところで、ご主人のお墓は、どこにありますか？〉

お墓は、ありません。

死体が、焼けたからです…。

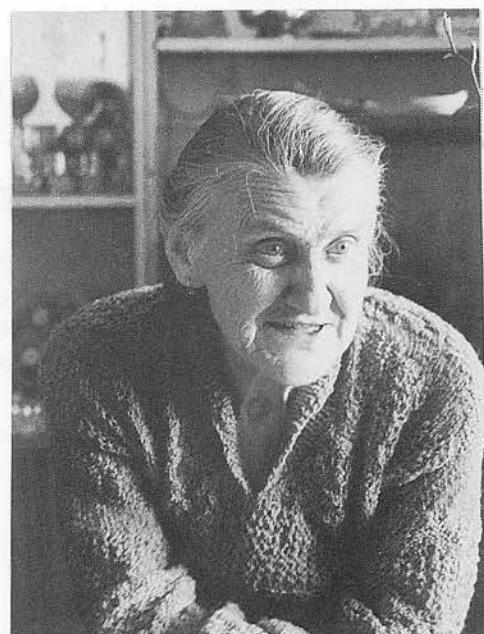


写真6 戦争の体験を語るステファニアさん



写真7 ワルシャワ蜂起の記念碑

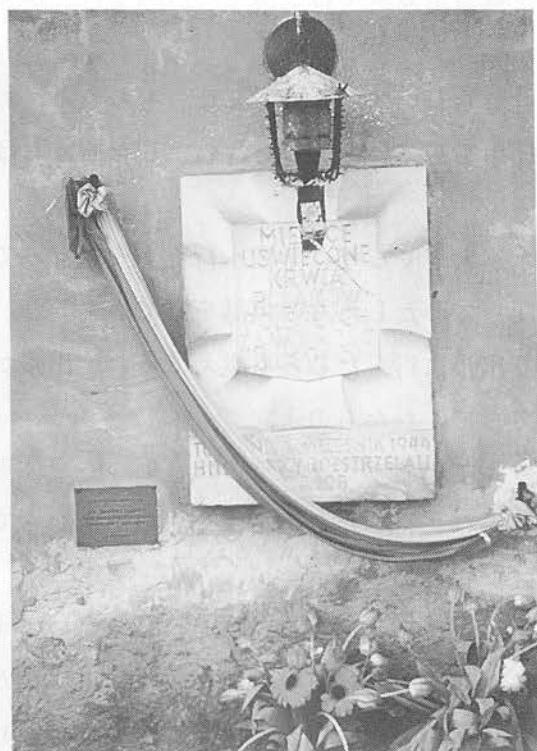


写真8 殺害された市民をまつる記念碑

エリジビエタの孤独

〈 エリジビエタさん、あなたはむかしのことを何歳ころから憶えていますか？ 〉

（エリジビエタ） 4歳あたりから子供時代のころを、いろいろ思いだすことができるわ。そのころは、お父さんと、おじいちゃんのこともよく憶えています。もちろん、お母さんとおばあちゃんのこともよく憶えてるわ。

おばあちゃんとは一緒にいて、とても仲よしだったですからね。おじいさんの背の高さは中くらいでした。顔はまん丸で、長い髪を生やしていたの。

その髪をわたしはいつも引っ張って遊んでいました。それから、いつもおじいさんと一緒に、タマネギを切って、板にのせて食べていました。そんなことをよく覚えています。お母さんがはたらいている姿も、はっきり憶えています。

子供のころ、お母さんの職場にもよく行ったの。何回も行ったことがありますから、よく憶えているの。

母はとても静か。いつも落ち着いている人でした。もちろん、わたしたちの世話をしてくれました。お母さんが仕事をしているあいだ、わたしたちはおばあちゃんと一緒にいましたから … 。

でも、あとでわたしたちが大きくなり、学校へ行くようになってからは、学校から戻って、お母さんも仕事から戻ってわたしたちの世話をしていました。

お母さんが、仕事でよく出張に行ったことも覚えてるわ。出張から帰るときは、いつもいっぱいプレゼント買っててくれたものよ。

おじいちゃんのことを覚えている … というのは、いつも夏休みに、わたしたちはおじいちゃんが住んでいる村に遊びに行ったことをよく思い出すからですよ。おじいちゃんはその村に小さな畑を持っていました。

〈 エリジビエタさん、あなたは戦争のことをなにか憶えていますか？ 〉

ええ憶えてます。おばあちゃんと一緒にノヴェ・ミヤストにいたとき、そこにはもちろんドイツ人もいました。ノヴェ・ミヤストが空襲にあったとき、わたしはおばあちゃんと一緒に、荷物を包み、その荷物を持って、森のなかを逃げたことを憶えています。

ほかの人たちも一緒でした。わたしの母は、ベルリンにいたときですね。

お父さんのことは、ちょっと憶えていません。お母さんのお話を聞いたり、もちろん写真を見たりしてましたから少しは憶えているけど。だってそのとき、わたしはまだ4歳でしたもの。写真を見ると、わたしはお父さんに似てると思うわ。

わたしたちがノヴェ・ミヤストに入ったとき、ソビエトの軍人がわたしによく食物をくれました。そのノヴェ・ミヤストという町はとても小さな町で、わたしはよく町はずれの草原へ行って、その小さな葉っぱを取って、こう話しかけてたの。

「わたしの大好きな、小さな小さな葉っぱちゃん。あなたもわたしと同じ孤児、みなし子ですか？ あなたは、だれ？ どこの葉っぱちゃんですか？ わたしと同じように、お母さんもお父さんもいないのですか？」

〈ああ、とてもかわいいですね。そうすると、あなたは独りぼっちで淋しかったのですね？〉

ええ。ほかの子供たちにはご両親いたのに、わたしにはいませんでしたから。でもわたしは、お父さんもお母さんもベルリンにいることを感じていました。

あのころいろいろ両親のことを知らせにきたとき、わたしのおばあちゃんが泣いていましたから。

わたしのおばあちゃんに、あるソビエト人が、
「ロシア語でひとこと言ってもいいですか？」
とそう話しかけてきたので、おばあちゃんは、
「はいはい、どうぞどうぞ」

と言いました。わたしはそのあとでソビエト人が言ったことの意味は、もちろん分からなかつたわ。でもあとになって、おばあちゃんにそれがどういう意味だったか、教えてもらいました。そのときソビエト人はドイツ人を殺すためにきていたんですね。

傷ついた少女

おばあちゃんとどこかへ行ったとき、わたしはドイツ人の裸の死体をいっぱい見ました。その死体は垣根の下に置いてあって、そこにいたロシア人はそのドイツ人の死体の手のなかに棒を入れました。それはロシア人が撃ち殺したドイツの軍人でした。」

〈それで、そのロシア人はなにをしましたか？〉
その死体を垣根ところ立たせ、腕のなかに棒を入れて、その人ドイツの死体に歩くようふりをさせたんです。それからソビエト人はわたしのおばあちゃんに、
「おばあちゃん、見てみろよ。このドイツ人、もうだれにも撃ち殺されないさ！」
とそのソビエト人は言ったそうです。

ドイツ人の死体は、裸のまま。すでに洋服は脱がされていました。裸のまま、垣根のところに死体で立たされました。

ロシア人はドイツ人の死体の両腕に棒を入れて、垣根にならべるようなことをしていました。わたしたちがそこを通るとき、一人のロシア兵がわたしのおばあちゃんに、
「おばあちゃん、ぼくらはもうドイツ人もポーランド人も撃ち殺さないよ。」
〈ソビエト人について、あなたはいろんなよく記憶していますね。あなたはロシア人

が好きでしたか？　ドイツ人は嫌いでしたか？〉

わたしたちはもちろんドイツ人を憎んでいました。でも、ソビエト人あまり好きじゃなかったわ。ドイツ人にたいするわたしの気持ち。

ドイツ人はわたしの主人を殺し、わたしの兄弟2人と、3人も殺しました。そしてわたしはひとりぼっちになりました。わたしは4人きょうだいだったから、わたしともう1人の弟が残っているだけです。ですから、もちろん憎しみです。

でも、ロシア人も好きではなかったわ。いまも好きではないの。よく分かりませんけど、わたしはソビエト人について偏見を持っています。というのも、ソビエト人は女人によく乱暴したからですよ。

ソビエト人はドイツと戦い、たしかにポーランドは自由な国になりましたけど、ソビエト軍隊はポーランドの女性によく乱暴したわ。わたしはその乱暴をぜんぶを見ましたから、わたしの心も傷ついたのよ。

〈そのことをもっと詳しく教えてくれませんか？〉

ソビエト軍が村に入って、もし村に女たちだけがいるとしたら、女たちをどこかに隠したり、連れてどこかへ逃げたり、そんなことをしました。乱暴と、それに泥棒もしました。

ポーランド人はポーランドに入ってきたソビエトの兵隊について、特別なことばを使っていましたからね。それは「野生の人間」「恐ろしい人間」、そういう言葉でしたね。

そのときソビエト人の振る舞いは、とても恐ろしく暴力的なものでした。ポーランド人はソビエト人をみると、人間ではなく動物の性癖を持っているような人間だと考えていました。話に聞いたところでは、ソビエト人はお料理に使う鍋のなかにおしっこしたり、糞をしたりで…。

わたしが憶えていることは、ソビエト人はいちどポーランドの農民に、ドイツ人の死体から靴を脱がせなさいと命令しました。ポーランドの農民は、それをやりたくなかったから靴を脱がせなかったわ。

なぜならポーランドでは、死んだ人のものを貰わないという、そんな習慣があるからよ。そのポーランドの農民はだれの死体でも、人間らしく習慣的なやり方で接しようと思いました。

でもそのソビエト兵は、それが分かりませんでした。どうして、ポーランド人は戦争のあとも貧乏でしたけど、死者の靴は貰わないのです。

それはもちろんドイツ人の死体だったけれど、ポーランドの習慣のなかではカトリックの教えで、どんな悪い人間の死体でも人間らしくお祈りし、土のなかに埋めることになりますから、ポーランドの農民がいくら貧しくても、ソビエト人に命令されたからといって、死者のものは絶対に貰いません。わたしはソビエト人が変なことをすること見て、どんどん嫌いになっていきました。

もうひとつ、絵のようなもの〔風景〕を記憶しているわ。

それはちょうど、ソビエト軍がノヴェ・ミヤストに入ってきたときのこと。そのときはソビエト人のほかに、あちこちにまだドイツ軍も残っていました。

わたしは井戸の近く立っていたの。そのときでした。だれか一人のソビエトの司令官が殺されました。井戸のあたりにソビエトの陸軍大佐がきて、みんなにきつい調子で、

「だれが司令官を殺したのか」

という詰問がはじましたんです。

「ドイツ人はどこにいる！ 司令官をだれが殺したか？」

それは何回も何回も、きつく聞きました。そこには農民、お年寄り、若い人といろいろなポーランド人もいて、みんな怖がっていました。

「ドイツ人はどこにいる！ ソビエト人を殺した、殺し屋はどこにいる！」
と何回も何回も聞きました。

もしポーランド人がそれに答えてくれないなら、ソビエト人はポーランド人を撃ち殺すつもりだったと思うわ。そのときでした。わたしのおばあちゃんは、みんなの前に出て、その陸軍大佐のところまでいってロシア語で、

「ソビエト人を殺したのはドイツ人さ。そいつは森の中へ逃げていったよ」
と言ったんです。わたしのおばあちゃんは、とても勇気がある人でした。おばあちゃんがそう言ったあと、ソビエト軍は馬に乗って森へ向かっていきました。みんな馬に乗って森のなかへ、そのドイツ人を探しにいきました。

でもおばあちゃん言ったことは、ぜんぶ嘘でした。おばあちゃんはポーランドの農民を助けるために、そういう嘘をついたんです。ソビエト兵隊さんは軍のどんな地位であったか、たぶん陸軍大佐でしょう。大佐はポーランドの農民を集めて、撃ち殺すつもりだったことは事実です。

親に反対された結婚

〈 エリジビエタさん、あなたの学校時代のことを話していただけませんか？ 〉

小学校は私立の学校で、わたしはそこに1年間だけ通いました。学校の名前は憶えてません。その学校は二人の姉妹でやっていたの。それは私立学校たったし、あとすぐその学校が廃校になりましたから、うちの近くの新しい国立の小学校に移ったのね。

ワルシャワで第39番という小学校で、1クラスが35人から40人くらいまでだったと思います。地理の女の先生のことや、わたしたちの担任の女の先生、音楽の女の先生のことも憶てるわ。物理の男の先生、歴史の先生のことも。

〈 少女のころは将来なになりたかったのですか？ 〉

最初は飛行機のパイロットになりたいと思ったことがあったわ。それから、学校の先生になりたかったの。

中庭で学校をつくって、学校ごっこをして遊んだくらいよ。近所の子供が集まって、学

校ごっこでよく遊びました。わたしは小学校の7年生のとき、大人の本当の先生たちの代わりに、下級生のクラスで授業やったこともあったのよ。

卒業してからは、5年間の教員養成教育学校に入りました。ポーランドでふつう小学校を卒業すると、4年制の高校に入れます。でもわたしはその5年間の教育学校を卒業して小学校の先生になることにしていたの。

学校を卒業してから、幼稚園に勤めることになったの。わたしは幼稚園で六歳の子供たちと一緒に、小学校に入る準備を手伝っていました。

それでじつは、卒業する前、学校に通っているとき、17歳で結婚したんです。その相手の人は軍隊の将校の学校を卒業して、医学の勉強をしていました。医学部の学生でした。

〈学生のときに結婚されてなにか問題はありませんでしたか？〉

ありました。というのも昼の学校は、結婚した女の子が通うのは禁止されていましたから、夜間の学校へ行かなければならなかったの。それは通信関係の学校で、その授業をうけるために520キロも通学したんですよ。そこは5年制の学校でしたが、1カ月に1回、3日間くらいそこで勉強して、夏休みには1カ月半くらいそこへ行って勉強するんです。

〈ほかに問題は？〉

お母さんはこの結婚に反対でした。まだ早すぎると…。

〈ステファニアさん、あなた母親として、どうして娘の結婚はまだ早いと考えたのですか？〉

（ステファニア）「まだ若すぎたからですよ。」

〈お母さん、あなたも16歳で結婚されたわけでしょう？〉

（ステファニア）「そう。でも、娘ちゃんと学校を卒業してから結婚してほしかったんですよ。それに大学にも入って、もっともっと勉強してほしかったんです。だから早い結婚に反対していました。娘は反対されたものですから、泣いたり、いろいろ嘆願したりでした。でも結局は許しました。」

（ふたたびエリジビエタ）戦争で死んだお父さんは音楽家だったから、お母さんは音楽学校を卒業してほしかったようね。

お母さんはわたしが学校へ通っているとき、いつかわたしたちのお友だちと一緒に、夫になる人と何回か会って知り合いになったんです。わたしはお母さんに、結婚を納得させようとしたの。

「お母さん、わたしが結婚すれば、お母さんだって樂になるはずよ。その人と結婚したら、わたしの洋服代とか、勉強代とか、毎日の生活はその夫がみることになるのよ。お母さんは、たった一人で、わたしと妹とおばあちゃんの4人のためにはたらかなければなら



写真9 結婚当時のエリジビエタ

ないわ」

と、こうしてお願ひしましたの。

夫のご両親は反対しませんでした。わたしはまだ17歳でしたけどご両親は、

「エリジビエタさんは、心のなかはほんとうに大人ね。人生のことを真剣にいろいろお考えね」

と思ってくれたわ。お母さん一人でわたしたちのために頑張っていましたから、わたしはなんとかお母さんを助けようと思ったの。

〈エリジビエタさん、あなたはどうしてその方が結婚相手としていい方だと思いましたか？〉

やはり、ハンサムだったからよ。とてもハンサム。とてもいい顔をしていました。わたしの好きな黒い髪、黒い目をしていましたもの。第2の理由は、その人の軍隊の地位をみると、中尉のちょっと下でした。それに医学生でしたから。

〈お母さんもハンサムだと思いましたか？〉

(ステファニア) 「はい、そう思いますよ。いつも軍服で背も高かったしね。」

(エリジビエタ) 夫は結婚のあと勉強と仕事。空軍の司令室に勤めていました。これ、わたしたちの結婚のときの写真です。わたしはまだ17歳でしたけど、100パーセント女だったのよ。結婚したのは1957年でした。

〈結婚してから、何年後にお子さんが生まれましたか？〉

ちょうど1年9カ月後でした。男の子で、一人っ子なの。最初に子供を産んだあと、わたしは3ヶ月の休暇をもらっていたね。

そのときは自分で赤ちゃんの面倒を見ていました。そのあとは仕事に戻らなければなりませんでしたから、赤ちゃんはわたしのおばあちゃんに預けました。わたしのおばあちゃん、息子を育てていました。息子はそのひいおばあちゃんのこと、とても好きでしたね。そのおばあちゃんは90歳で亡くなりましたけど…。

息子がまだ妊娠してると、それに息子が生れたあとも、この子がどんな職業につくのか、どんな人になるのか、そんなことはまだ考えなかったわ。

でも息子がどんどん大きくなると、やっぱり息子の人生のこと、職業のことを考えたし、わたしなりに小さな夢をもついたわ。

アナウンサーなってほしいとか、主人と同じようにお医者さんになってほしいと思ったの。でも息子は船乗りになろうと思っていたのね。結局はどっちにもならなかったけど、お母さんたちが子供にお医者さんなってほしいというのは、ポーランドではそんなことよくあることよ。

〈そうすると職業について、あなたと息子さんと考えが違ったり、争ったりしたことはありませんでしたか？〉

誤解とか喧嘩はなかったわ。なぜって、わたしは若いころの自分のことを思い出したか

らなの。わたしの母はわたしに違う学校に入つてほしかったのね。わたしはそれとは違う学校へ行きました。

それを思い出して、わたしも息子の好きなようにさせました。息子がお医者さんになりたくないなら、しかたがないと思ってね。もちろん息子に大学へ入つてほしかったけど、ぜんぜん違う学校を自分で選んで電子技術者になりました。

＜結局は船乗りにならなかつたわけですね？＞

息子は母親のせいで、その道へ行けなかつたと思っていたようね。いまでも残念に思つているようよ。そのことについては、母親に恨みをもつています。船乗りになろうとして、ヨットに興味をもつていろいろ勉強していましたもの。

でも母親としては、そんな息子の興味をぜんぜん気にしていなかつたから、いろいろ邪魔をしていたことになるのね。

息子が電子技術の専門学校に入ったときのことですけど、そのころヨットに興味をもつていました。でもわたしはいつもヨットの基地へ行くのを禁止したり、ちょっとありましてね。

息子には船乗りになつてほしくなかつたからです。いつも息子に邪魔していましたわくね。でも息子がまだ小学生で小さかったとき、わたしにこんなふうにいってくれました。

「お母さん、やっぱり船乗りになることやめたよ。お母さんを一人にしたくない。ぼくはお母さんを、ここに一人だけ残したくないからさ」

といいながら、あとになって息子は、またヨットにとつても夢中になつてしまつたのね。息子はたぶん早く独立したかったと思います。ちょっとでも母親を楽させようと思ったのでしょうか。

その後は専門学校を卒業したら軍隊に入つて、そこで2年間おりまして、後で家に戻つてから結婚しました。

わたしは息子にたいして、ずっと母親と父親の役目をしていました。息子の教育については、とくに問題はなかつたですね。小学校のときも、ぜんぜん問題なかつたですね。ごくふつうの男の子でした。

小学校のときは6月になると、学期が終わるので、つぎの学期のためにいつも自分で教科書や必要な文房具を買ってきて、つぎのクラスに入るために、いつも自分で準備していましたよ。

家のことも手伝っていましたね。例えはいつかテレビが壊れたとき、わたしは忙しかつたから、息子にテレビを直すように頼みました。あの子は専門家を呼んで直してもらつて、おつりもちゃんと返してくれました。だから小学校のときは、とても良い子だ子でした。

＜息子さん夫婦は女の子が2人ですし、おとなしい感じの方ですから、きっとおたくの家庭ではずっと女人が強かつたんでしょうね？＞

まあ、そんなことなるでしょうね。でも家庭のなかで女が強くなつたということは、ボ

ーランドでは戦争のあとよくあったことですよ。この家庭でも、息子は女のなかで育ててきましたから。

離婚へ

〈エリジビエタさん、こんなことをお聞きしていいですか？あなたの人生のなかで今までいちばん辛かったことは何だったでしょうか？〉

離婚ね。やっぱり夫との離婚です。

結婚してから4年間くらいは、夫と息子と三人で住んでいましたが、夫は息子と暮らしていくても、子供にはぜんぜん興味を示さないし、何にもしませんでした。息子はきっと、父親に恨みをもっていたわ。

それにわたしたち、たまにしか会えなかったんです。ほんの短いあいだ、ちょっと話しをしただけでしたわ。年に1度、いいえもっと少なかったです。

それでわたしは夫のアパートを出て（別居し）、お母さんのうちへ戻ってきんですが、そのころ夫は自分のアパートにいろんな女を連れてきて、楽しく遊んでいたわ。

わたしたちが住んでいるところは、母の家にとても近かったの。建物が2つくらい離れているだけ。でもわたしのいるところへ、夫はぜんぜんこなかったんです。息子はわたしといっしょに母の家に住んでいました。

〈すると離婚の理由は子供のことからですか、それともご主人が遊び好きだったからですか？ほかになにか考えられますか？〉

全体的に考えると、やっぱり彼のつき合いかた、いつも女がいること、やっぱりそれが原因でしょうね。彼はいつも男友だちと女友だちと一緒にいました。それがすべてでしょうね。

夫は酒、アルコールと遊び好きで、いつも酔っ払っていました。わたしも怖くて、息子にはお留守番をさせなかつたらしく。

最初はそうでもなかったのですが、わたしと別れてからは、どんどんアルコール中毒になりましたよ。わたしがそのアパートを出てから、どんどんアルコール中毒に落ちていきました。自由になって、遊び放題やっていましたもの。

〈しかしながらあなたは、離婚の原因がご自分の側にもなかったか考えませんでしたか？〉

そうですね、たぶんわたしが母とあまりにも仲良しだったことでしょうか。わたしと母とは、とても強すぎるくらい結ばれていましたからね。

わたしは夫と母が、すぐ仲良くなることを願ってたわ。そのとき母ははたらいていましたから、わたしのおばあちゃんがわたしたちのためにお昼ご飯やお料理をつくっていました。わたしもそのとき、勉強も仕事もしましたから。わたしたちは、お食事をいつも母とおばあちゃんいっしょでした。

最初はもちろん、わたしがぜんぶ自分でしていました。お料理とか掃除、ときどき料理

の作りかたを知らない時は母に電話をしたりして、最初はそのように暮らしていました。その気持ち、その願いは、わたしのなかでとても強かったの。

わたしは夫に毎日、母の家へ行ってほしかったです。できるだけ、ぜんぶうまくいってほしかったの。でも子供が生まれてから、わたしたちの間でどんどん喧嘩がふえて、仲が崩れていきました。離婚したのは1966年。

＜離婚届はだれが出しました？＞

たぶん、わたしだったと思います。でも届けを出したのは十年くらい経ってからなの。わたしは最初、夫のアパートから母のところに戻っていたんですけど、あとになってわたしたちは夫がはたらいていた軍隊からアパートをもらいましたから。

〔別居をしていたのに〕夫婦としてそのアパートが無駄にならないように、夫のところへ引っ越さなければならなかったのね。だから、また二人で住むことになりました。夫が1部屋をもらって、わたしは別のもう一つの部屋に住んでいたの。そのころ夫は軍隊の指揮室に勤めていましたが、あと1年間は医学部の勉強が残っていました。

そのアパートには3年間いたんです。でもわたしはだいたい一人、いつも自分の部屋に一人でいたのね。でもそのころ、夫は息子の顔をみることができました。

＜その3年間たったあと、お父さんと息子さんのと関係はそれで終わりましたか？＞

いいえ、そのアパートから夫は出ていきましたのよ。違うところ引っ越ししていったので、わたしは息子と一緒にそこに残りました。そうね、そのアパートを出たあとからは、父と息子の関係はもう消えましたね。切ったわけですね。

夫はその軍隊からもらったアパートを出たあと、息子のこととはまったく関係なく生きていましたよ。子供にぜんぜん興味がなかったんですね。わたしは何回となく夫と連絡をとしようとした。

ちょっとでも、父と息子が結びあえるように、何回も連絡をとりましたけど…。しばらくたってから、主人がすでに引っ越しして、どこかへ行ったと聞きましたが、その後はなにをしていたか知らないですね。

＜ご主人は再婚しましたか？＞

いいえ、しませんでした。でももう亡くなりました。だいたい1972年に死んだと思します。そうだったでしょう、お母さん？

(ステファニア) 「うん、そうね。わたしの母、あなたのおばあちゃんが真だのが1971年だから、彼はおばあちゃんのあと、72年くらいになるでしょうよ。」

(エリジビエタ) 息子が18歳のときに、主人が死んだのね。お葬式だけは行ったわ。息子のためになると思って、おばあちゃんと私と息子と、家族全員で花を買って、夫のお葬式に行きました。

わたしも再婚しなかったわ。どうしてかしら、よく解らないけど、子供にとって再婚しない方がいいと思ったからね。初めの結婚でいろいろな体験したから、子供のために生き

ていこうと決心しました。

わたしと結婚してほしいという男性もいましたよ。でもいろいろ考えて、なかなか決めることできなかったの。わたしには合わないと思ったし、ほかにもう一人、わたしととても結婚しがっている人もいましたが、とても厳しいかたでした。

だからわたしは、いろいろ考えて、やはり結婚しないことに決めたんです。その人がわたしの息子にとって、いいお父さんになるかどうかも不安でしたしね。それから自分の子供は自分で育つことに決めたんです。

〈しかし、お金のことは困っていませんでしたか？〉

わたしは朝7時から、夜11時まではたらいていました。さっき言ったとおり、ずっと幼稚園で働いていましたけど、そのほかに文化センターで取締役としてもはたらいていましたから…。

朝から夕方5時まで幼稚園で、5時からからはその文化センターで夜11時までだったわ。息子がもう小学校に入っていたときから、毎日、朝から夕方まではたらいていました。家へ帰るころは、外はいつももう真っ暗でしたよ。

離婚の裁判では、父親が毎月わたしにお金をくれること決まっていたのよ。でもわたしも一度もそのお金をもらったことなかったわ。

〈あなたの主人は軍人だったから、何とかなりませんでしたか？〉

いいえ、なにも。あの人は軍隊から追い出されてしまいましたからね。アルコール中毒で、お酒を飲んでたばっかりでしたから、首になったのよ。

〈あなたは息子さんが生まれてからずっと、息子のためにだけ生きてきましたか？それとも、自分だけのためにににかいいことありましたか？〉

自分のためだけですか？ たぶん、なにかはありましたでしょう。時間（の余裕）も少しもあったと思うわ。でも本當いうと、わたしは母と同じように、できるだけなんでも子供のためにだけずっとやってきたようにと思うの。

もちろんたまには、自分の時間もありましたよ。だって、ただずっとはたらき続けるだけだったら、長続きできないでしょうに。

でも息子の結婚のことは満足しています。孫も、とてもかわいいわ。いまは自分の孫を、自分の子供よりも深く強く愛しているわ。おばあちゃんたちもそう言ってるの。

おばあちゃんたちはもう成人した人間ですから、ひ孫たちにたいする愛もとても大人らしくって、わたしなんかよりもっと広い深い愛ですね。

〈ステファニアおばあちゃん、あなたは、エリジビエタさんの息子を育てているとき、同じことをいっていましたか？〉

（ステファニア）「もちろんです。わたしの孫は世界でいちばんいい孫ですよ。」

（エリジビエタ）「そうですね、母はいまでもいつも息子の味方していますもの。」

（ステファニア）「いまは、わたしの恋、わたしの愛はひ孫に移りました。」

あとがき

ポーランドはかなり自由な社会になりつつある。饒舌なポーランド人といえども、寡黙を強いられていた時代があった。個人が自らの生活体験を、赤裸々に異邦者に語れる環境が、いまポーランドに蘇っている。生活史が個人の出来事に属するといっても、政治や戦争など歴史的出来事にかかわるかぎり、スターリン体制の時代には、自由な発言ができなかつたであろう。本稿の口述生活史を再読してみて、秘密警察の監視がなくなったポーランドで、人びとがようやく自分を語り始めたことがよく理解される。

本稿2編の作品は、すべて録音テープから起草したものである。生活史の記録にあたっては、話者から録音の許可を得る礼儀は当然のこととして、話者との信頼関係を前提として進められる。記録を集約するばあいは時間的な配列などについて、編者が若干の編集をほどこしているが、口述そのものの資料的価値が損なわれないように、口述内容をできるだけ忠実に記録することに配慮している。したがって本稿では、口述内容を分析したり、口述内容に関して編者の見解を述べることは避けた。

インタビューを依頼するばあいは、このインタビューがやがて日本語で出版されることを含め、話者に対して聞き手側の意図・目的を明確に述べている。ここに登場する人名等はすべて実名であり、実名での出版についても話者との了解がある。最初は仮名にすることを考えたが、筆者はこれまで発表してきた生活史資料はすべて実名であり、生活史をその話者の作品として残す意図を今回も貫かせていただいた。

本稿の責任はすべて筆者にある。この生活史資料を利用される方、または目に触れた方は、実名の話者に迷惑をかけることがないようとくに、格段の配慮をお願いしておきたい。

LIFE HISTORY OF POLISH FAMILIES I

Nobuyoshi OHYAMA

This paper includes two life stories of Polish peoples, with whom I, as an editor and an annotator here, interviewed in March, 1990, on the occasion of the joint research concerning about the industrial relations of Poland and Japan.

These oral stories in this article are entitled as follows:

(1) "In the Common Nest : Life History of a Job Leader"

A story teller is a worker of Swierczewski, the precision factory in Warsaw, established in the year 1898. His position is a master[mister] of a small production group named 'brygadowy system', which was reformed in 1986 as a new independent unit of productions. He called his group fellows 'our nest', and tells how this nest was reorganized.

(2) "Conflicts Stamped In:War Experience of A Mother and Her Daughter"

A second story is a kind of two-character play, because the watchs of two womens' personal history were almost directly together during some period of the World War II. A mother born in 1923 narrates her own experience in the custody working camp, and of her husbands' death who falled victim to the War. Her daughter born in 1940 tells about her postwar tragic accidents occurred before her eyes.

These interviewing materials are not only descriptions of family life histories, but may be expected, for the many students of humanities, to be the newest informations of Poland and Polish peoples today.

Nobuyoshi OHYAMA, Life History of Polish Families I / REC TECHNICAL REPORT No.0002
[SS360] March, 1993 / HOKKAIDO RESEARCH CENTER OF ENVIRONMENT AND CULTURE
SEISHU GAKUEN, SAPPORO, 004 JAPAN.

○執筆者紹介

大山 信義 (おおやま のぶよし)

北海道環境文化研究センター所長
静修短期大学教授

平成5年3月15日 発行

編 集：北海道環境文化研究センター

発 行：(学)静修学園 和野内 崇弘

〒004 札幌市豊平区清田4-1-4-1 ☎(011)881-2721

